

## 第4分科会 人権確立をめざすまちづくり

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか

### ①分散会

#### I はじめに

(基調提案) 人権確立を目指すまちづくりをどのように進めていくかに向けて、以下の視点で意見交換する(討議の柱 p. 48-49 参照)

- ①被差別部落の子どもたちをはじめ、すべての子どもたちが自己の社会的立場を自覚し、差別をなくす主体として生きる力を高める取組がどうなされてきたか
- ②部落解放子ども会活動などをすべての子どもたちの活動へどのようにつなげるか
- ③様々な人権問題の解決に向けて関係団体とどのように連携していくか
- ④識字学級などの活動を通してすべてのひとの学びと希望をどの様に進めるか
- ⑤差別の中で生き抜いてきた人たちの文化を継承しその自信やほこりを明らかにする
- ⑥部落差別解消法などを具体化し、地域の教育力を高めまちづくりにどうつなげていくか  
具体的実践を報告しあいながら進めていくと大会の要旨を伝えて、討議に入った。

#### II 報告及び質疑討論の概要

##### 一報告1—①

##### 和太鼓がつなぐ人との「絆」、和太鼓が伝える「人権の大切さ」 (大阪市人教)

学校等での公演を通して交流していく中で、子どもたちをはじめ人との絆を作ってきている。どの様にしてきたか、皆さんと一緒に夢を語れたらと思う。太鼓集団は、被差別部落にルーツのある人間がかかわって、5つのチームが集まった団体。1999年に大阪で開催した太鼓のイベントがスタート。和太鼓の職人さんが、被差別の歴史を持つことがあまり知られていないので、被差別部落の産業を紹介しながら演奏を通して一緒に考えていく目的で活動している。被差別部落の出身者だけではなく、小学生から活動しているが太鼓が好きだというメンバーがそのルーツを学習していつている。大阪の中学校で、太鼓の演奏からルーツを語ったときに「部落って何ですか」という発言があり。メンバーから具体的に学習できるよう語りを入れた活動をしている。また、震災支援としても各地に出向いている。子どもたちが部落差別を知るきっかけづくりにもなっている。

「勇気をもった、元気をもった、堂々と講演することで、隠さなくていい、堂々と生きていいんですよ」との感想などももらっている。若い子どもたちが活動の中で夢を語れるようなそんな子どもたちに育てたい。

##### 一主な質疑と意見一

**高知** ネットで判断する差別の話があったが、ネットは氾濫しやすい。間違った認識をもってしまう人がいると思う。詳しく教えてほしい。

**報告者** 大阪教育大学の100人弱の生徒さんにYahoo!の知恵袋に対するベストアンサー、「部落はあります。女子、子どもが歩く場所ではない」と出ていた。ことに学生は、8割が信じると答えたが、知らないことについては、判断できないから信じてしまう。「自ら知る」ことが大事。もっと正しいことを発信しないとイケない。いま、なかなか部落ということ伝えていく状況がある。このような学習の中で子どもたちに伝えていきたい。

**千葉** 和太鼓の活動以外で、皮革産業の方の話を聞いたりすることはあるか

**報告者** 和太鼓演奏以外に、浅香に住んでいるが、ここ数年間他の地域にフィールドワークに行くことがある…芦原市など

**福井** 隣保館で太鼓の活動をしているがなかなか人が集まらない。募集はしているのか? 団体の協力者など経済的なこと、続けていくことの難しさは?

**報告者** 団体によって違うが、過渡期があって、太鼓教室小2から中学生が参加 楽しんでもらう。誰もが参加できるし地域も関係なく参加できるようにしている。財源は厳しい、講演会の謝礼金が活動費。2015年については、海外で、クラウドファンディングを利用した。中学校卒業後の継続が難しいが、太鼓だけではなくつながりを持っているので、その後のかわりがある。意識してつながりをつくるようにしている。

**高知** 解放教育の中で子どもたちを巻き込んだ活動ができていない。学校の授業など、学校とのかわりはどうか?

**報告者** 大阪市内の市民交流センターは廃館となり、練習場所をなくした。その中で、学校の空き教室で練習ができるようになった。その後運動会で和太鼓演奏を希望した学校の先生方と協議しながら進めていった。それぞれの太鼓チームも地域とのかわりを大事にしている。積極的に学校とかわりささえていただいている。

**高知** インターネットのことで、学習をしているが、LINEで計画を共有している。うまくつながっていると、人権教育がいいなと共有できた例がある。楽しいことからつたえられる取組の一つとして、ネットをうまく使うのも一つと考える。自分も夢をもって取り組みたい。・・・感想

**熊本** セクシャルマイノリティーは世界共通のものがあると思うが、他国で、部落差別と同じようなことがあると思うがどうか

**報告者** ヨーロッパでもあると聞くと、日本の和太鼓が海外にもあって例えばイギリスにもある。「部落差別」が向こうの方にはわかりづらい。部落差別は追いかけてくる差別…意味が分からないという…部落差別は定義が難しい。和太鼓は感情、差別も感情だと思う。悪い感情を良い感情に変えていくことができるのではと考えている。ネット利用についてはこれから打って出るための利用はしていく。夢のあることと考えている。

**千葉** 大阪の子たちが部落を知らない。自分の出身を子どもたちがわかるような話をいつどのようにしているのか。部落出身だとわからない子どももおおい。大阪ではどのようにしているか

**報告者** 同推校でない中学校で質問があったこと「部落って何?」。和太鼓楽しいから入った子たちに、自分たちの活動に参加してもらったりして、講演に行ったときに、活動への思いをメンバーが話し横で聞いている状況が大きい。地域外の子が活動するとき、差別の対象になりうることを親御さんに話して参加してもらおうが、そういうことこそが問題だと言って参加していて、自分の地域での活動もしていくようになり、少しずつわかってくる。

一度立ち止まったことがあったが、なぜ太鼓だったかを話したことがあった。子どもたちは、どの時点で考えるかは全くわからないが、つながりの中で差別について考え触れていってもらうなどして、仲間、友達として伝えていっている。

**京都** ①社会教育の中でも、学校教育の中でもどういう事前学習をするかが大きな課題となっている。②学校に対しての思いは

**報告者** ①一回目には、事前学習はどのようにしてますかと聞く。どのようにすることがわかりやすいかと考えて準備。やってほしい具体案があれば教えていただきたい。②かかわっていくことが大事。どんな形で会っても、良いので声かけていただきたい。

**香川** 地元や、周辺小学校とのコラボがあれば教えてほしい

**報告者** 小学校を会場に練習しだしてから、学校とのつながりが増えた。募集も手伝っていただいた。周辺の小学校へ行くことがないと今、気づいた。こちらからの発信をしていきたい。

## 一報告2—⑭

### 私が本当の部落の人間になる日 (千葉県同教)

報告者は1949年九州うまれ、父はカバン職人。事業に失敗、離婚、部落出身の現妻と出会う。息子が地域の学校に入学。同推教員の先生の学習会への誘いを断っていたが、子どもたちを見ていただきながら先生は毎日家に来た。

自分はそんな先生から地域の同研に誘われ参加するようになったが、妻は家のことを絶対に話さないでというその理由については自ら語ろうとしない。その後子どもにどのように出身を伝えるかの保護者会に参加。義理の母が話をすると身内が嫌がるとも思い、子どもが部落を悲しいものにとらえてしまうのではないかと戸惑いがあった。自分たちもどのようにしてよいか迷い、先生から話すように言われるが1年間悩んだ。先生に諭され子どもに出身について話したが、なんとさりげない反応であった。出身だといわれても、明日から変わるわけではないという。何を悩んでいたかと思った。弟は特別支援学級に通う。兄の方はクラスの子がお前の弟は馬鹿だといって、居心地のよくない思いをした。家の中でも弟を特別扱いしていたことに気づく一方、部落民といわれる自分は、村の中では「部落民でもないのに」といわれるように感じていたので、地域との交流は避けていたが、支部役員から「私はムラの間人ではないのでよく言っているのはなぜか」と問われることで、以前東京に住んでいた時の教員の対応について話した。「あなたは立派なムラの間人だ。過去のことにいうものは、ここにはない」。ムラの一員として認められた思いでうれしかった。長野大会に家族で参加、妻も知り合いの先生に会い嬉しそうだった。その後も様々な機会に学習会に参加するようになった。息子の兄の方も部落の問題を学習することで弟のことをよく考えるようになった。この報告を通して、自分の部落に対しての差別性に気づく。また、障がいのある息子しても偏見を持っていた。妻が、自分に対して自らを語る時にはじめて、本当の部落民になるときだと思っている。

### 一主な質疑と意見一

**島根** はじめ自分はあると違うと言いながら部落に入った。主人は、自分のことを話さない「また同和か」言っている。今は部落から排除されたが、子どもたちがさまざまな機会に参加できるようにはかっている。学校の先生方にわかってほしいと思っている。・・・感想

**鳥取** この分科会を選んだ理由は、ネットに出ている、「要旨」について、「本当の部落民になる日」問い言葉を選んだ意味合いを教えてほしい。この言葉の真意を聞いてみたい。自分は出身ではないといいつながら、父がカバン職人であるといいつながら出身ではないと言っている。コミュニティーの一員ではなく部落の間人になるという言葉を読んでいる。また、あえて認められないといけないのか。部落の間人であろうがなからうが、反差別の立場で立ち向かっていけばいいのかなと思うが。

**報告者** 初めに東京での友人との出会いから、その友人の気持ちを知らなかった。お父さんも、父

もおしえてくれなくて、解放同盟を紹介してもらったが、自分の気持ちとかい離しすぎてそこから離れた。なぜその友人が悩むのかが理解できなかった。みんな知っている部落をよく言わない地域の人に聞いてもあいまいな解答で理解できない。部落に入ればわかると思った。差別はいけないことはわかっているのだが自分が弱い者の立場に立ったことがなかったの、理解できなかったのだと思う。

**協力者** 打ち合わせの時にも話したが、部落出身でないと考えていたことが差別意識だったと言っていたということを理解していただきたい。

**高知** 高校の娘さんの話が出ていたが、同推のことに対して、マイナスイメージを持っていたのではないかなと思うが、今はどうなのか

**報告者** 長女は抵抗が無いようだったが、下の子は差別的な中学校に行かないといけないと思い、先妻の実家のある長野県の中学校に通わせた自分も悔しかった。そんな経験から「同和」のことは嫌いだと言っている。

**大阪** あなたにはわからないといわれる状況の中で枕詞のように「自分は部落民ではない」というのもわかるように思う。部落問題の継承ということについてどのように考えているか。何もわからなかった自分が部落民として、次世代にどのように伝えていきたいのかを伺いたい。

**報告者** 現在進行形でよくわかっていない。どのように伝えていいのか次世代にまかせたい。以前は教員から差別的態度をされた経験がある部落の人たちには、体でぶつかっていかないと解決は難しい。なかなか解決しない差別問題の解決には教員の協力が必要です。よろしくお願ひします。

**熊本** 印鑑を押さなかった教頭先生に腹が立つが、糾弾があったとのこと何があったからか。自分は部落の人も障害のある人も自分のためにお付き合いをしているが、下の子といることで報告者が気づいたことをおしえてほしい。

**報告者** 東京には部落はないという中でも同推教員がいるが、おざなりの認識しかない教員がいた。そんな教頭であったということかと思う。下の子は、ADHDで、特別支援学級にいれようかとも思ったが、兄がいる小学校に通わせたかった。親の見栄とかでなく当人のことを一番に考えた対応をすべきと考える。

**報告者** 同じムラの方で、あの時私に怒鳴ったときの気持ちを語ってほしい。自分が変わったきっかけだったと思うので。

**千葉** 報告者はこのような活動はやめましようといった。私は部落の人間ではないとよくいっていたので「報告者は違うというが、子どもはどうなんだ。奥さんも被差別部落の人だ。私が認める。あなたは部落の人だ」と。それから報告者は変わった。部落の人は差別を受けながら育った。その

まま大きくなった。だから自分のために勉強できる運動を続けてきた。

### —1日目のまとめ—

2本の報告をいただいたが、報告者①から一言  
**報告者①** …暗いところから明るいところを見て、見えたところから活動していくことと父は言っていた。これから自分たちに見えてきたところから活動していきたいと考えている。

**協力者** この分科会は社会教育ですが学校の先生方、もっと本気で勢いをもってしてやと言われたことがキーワード。先生方が学習して取組を進めていく必要がある。まちづくりと学校がとても大切なつながりを持つ。学校その周りの地域、保護者はそれぞれなにができるのか考えていきたい。参加の私たちができることは何かを今自分の立ち位置で、何ができるかを気づけるようなヒントがあると考える。

出身ではないから理解できないよと言われたことばがきっかけで報告者②の行動が始まった。わたしたちは、出身である無いに関係なく、まちづくりにかかわっていくと思っているかと思うが、それぞれの方にそれぞれのきっかけがあると思う。「こころの毬栗が引っかかる」という言葉がある。差別だと言えなかった自分が、それがチクチク痛む。だれもが不完全の中で活動している、そのあたりを意識して活動してきたと思う。

### —一日目の振り返り—

・先生たちへの期待が大きかった。社会教育の分科会であったが、その周辺の団体や地域住民としてどのような取組、活動ができるかを今日の報告も含めて深めていきたい。

### —報告3— ⑩

#### —一番安全で安心できる学校を選びました

(熊本県人教)

支援学校との居住地校交流で、一人の生徒(ももかさん)のクラスの友達とのともに暮らすことの意義を感じた事例を紹介した。

参加した子のバギーに乗っている弟(あいとさん)との出会いにつながっていく。

あいとさんの入学までには、行政との連携の中看護師や医療支援員の配置、施設設備の準備が進められた。

子どもたちには、疑問があれば丁寧にあいとさんのことを伝え、「機器とともに居るあいとさん」が当たり前になっていく。「あいとさん100%だけんスーパー元気」問い言葉が飛び交う。

運動会では、先生がバギーを押して一緒に走るなどを初めて保護者席で見のお母さん。新鮮な気持ちで聞く。社会の一步を歩みだしたように感じたと言った。

そのお母さんが報告者のいる小学校を選んだのは「あいとが一番安全で安全な小学校を選びました」「支援学校では看護師はいるがいつもは母

がついていて、具合が悪くなったりしたときに対応してくれる」とのこと。あいとさん、おかあさんから「ともに過ごす」ことがいかに大切か、さらにそれは地域での生活の最低限のことができただけのこと。地域との連携し、地域が変わってきている。今後も支援員の先生方とともにクラスの子どもたちと、共に歩もうとしていることを大切に、まちづくりに取り組んでいきたい。

子どもたちが地域でいけることが、そのまま解放運動となる。ももかさんの小冊子や、DVDもある。(あいとさんの学習発表会の様子を視聴)

### —主な質疑と意見—

**高知** ありのままを受け入れることの大切さを教えてもらった。保育の立場で益城町に行ったが、なかなか復興が進まない現状をみてきた。保、小連携の状況を知りたい

**報告者** 学校全体としては、小学校への入学に当たって体験入学などをするが、あいとさんは保育園に行っていなかったもので、別のルートで、他の施設と連携を取りながら、来ていただいて体験入学をしていただいた。

**愛媛** 先生の姿勢がクラスみんなに伝わったと思うが、プラスの先生からの働きかけはどのようにされたのか。反発する生徒はいなかったか

**報告者** 30人のクラスで、違和感なく近づく子もいれば一歩引いた子どももいたが、どの様につないでいくかを考えた。

あいとさんの横に自分がいて、得意なことを伝えたり、体調のことも丁寧に伝えていった。はじめ距離のあった子どもも少しずつ距離を縮めていった。

入学式などの時にも、お母さんにも協力していただいて、保護者の疑問に答えてわからないことを聞いたりしていった。

折に触れ、ももかさんのことや、震災の時の状況なども話してきた。うちの学校は避難所になったので、その時の障害のある子どもの様子なども伝えて行ったりした。

あいとさんにとっても、他の子どもたちにとっても良い機会になると思うと伝えた。

保護者から、どの様なことに気を付ければよいのかという質問があり、お母さんから出産のときのことを話してもらった。

**高知** 11年前に比べ、現在の行政の対応が変わってきたのはどうしてか。学校だけではなく地域の連携はどのようになっていたか。

**香川** 知的障害の通う学校での訪問教育を実施。なかなか学校に通えない子どもたちが、小学校に通えたももかさんの存在は大きかったと思う。ももかさんと、子どもたちのかかわりの様子や、ももかさんのその後(卒業後)についてお聞きしたい。

**報告者** 11年前のももかさんの対応は、職員か

らの反応は芳しくなかったが、保護者の方からの後押しもあり実現した。例えば流動食の提供について給食センターからクレームがあったが、その後特別食を考えながら準備してくれた。

様々なところで現状を話したり、全国でのお母さんの発表を受けて、理解も得られその後の対応もしていけることになった。

自分が転勤になった後でもその後の先生方との連携があり、中学校へも行き修学旅行にも付き添いなしで行ったりすることができた。まだまだ十分ではないと思っている。

本人自身のコミュニケーションスキルをUPすることや、内部からの変革も意図して、今、ももかさんは特別支援学校に通っている。

**熊本** 今のももかさんのことに関連して、入学に際して、最初は学校にエレベーターをつけてほしいといったが、「一人のためにどうして」との反応であったが、耐震補強する際にもエレベーターは必要とのことになり、災害があると地域の人も非難してくるので、熊本地震の時にエレベーターがついた。ももかさんのことがきっかけで耐震工事をしたおかげで、熊本地震の時には校舎は倒れなかった。

体育館は耐震工事していなかったので使えなくなった。

**報告者** ももかさんが避難した避難所の中では皆さんが困らなかつたといっていた。(普段から声をかけあっていたので)

**熊本** 益城町には、行政の方のみではなく地域団体との連携があるからこそ、そのようなことができたと考える。

**鳥取** 地域で暮らす育住教育は大事と感じた。養護学校で生活してきた人が、卒業して地域で生活を始めてもなじめない現実がある。行政、地域の連携の中で生活することの大切さを感じる。学校で頑張る先生がいることだけではなく、学校だけではなく地域との連携をどう図っているか。だけれども、地域で暮らせる環境づくりが大切。どのようにしてきたか知りたい。

**報告者** はじめ、ももかさんのお母さんには会ってもらえず、「養護学校に通っていますし…」「うちのような子は地元の学校に通ってはいけんとでしょ!？」地域の学校には通ってはいけないと思っていたと実感。どの学校でもすべての生徒が地域で暮らせるようになっていくかといえそうはなっていないが、一人でもいいから思いをもっている先生がいれば繋がっていけると思い活動している。

地域の学校に通わせられない子どもの存在を知った時の憤りがあつたことがきっかけで、学校、保護者との連携、信頼関係を築いてきた。

**佐賀** 自分が現職のときに障害のある子どもさんを受け入れた経験があるが、お母さんの意識と

地域の方々の意識がとても大切。

担任を誰にしてもらうかも悩んだが、立候補者がいたこと。行政との連携は不可欠であった。お母さんの付き添いの部屋の準備と、加配教員の配置をして対応してきた。

今は成人し、理解ある企業に就職できている。

#### —報告4—①

### 「部落に嫁いで私の」～A町子どもを育てる会へのつながり～ (高知県人教)

20歳の時に親の反対を押し切って、被差別部落に嫁いで来た。

部落外の幼稚園に子どもを通わせた自分は、結婚差別を受けた自分が差別者だと思っていた。その後、地域に受け入れられるかとの悩みを持ちながら、社会教育指導員になってと言われたが、地域の方々に「私たちは意見が言えない、私たちのために引き受けや」と後押しされ、その活動を続けてきた。

地域で子どもを育てる会の運営は、自分の思いをちゃんと自分でいえる子どもたちにとの思いで活動している。地域の大人たちが生きざまを語り子どもたちの意識に踏み込むというスタイルも。

教育委員会の協力もあり形づくられてきたこの活動は、今地域の教育力にもつながっている。地域の子どものために地域文化伝承として祭りの踊りを続けているという活動も育てる会として行っている。

自分の取組を人権劇とした発表は、これからの子どもたちに自分の言葉で自分の意思が伝えられるようにとの思いで受け入れた。

地域の様々な人の拠点として機能している。そして仲間に出会わなければ自分は差別者のままであったと思っている。

お嬢さんからの手紙（私たちの活動が間違っていなかったと思える手紙）

結婚、就職できない部落差別に悩む子どもたちを絶対に作ってはいけないと思って母の活動が理解できるようになった。母の周りにはたくさんの方がいたと思うありがとう！お父さんと、お母さんから生まれてきてよかったと思える。

#### —主な質疑と意見—

**徳島** 子どもを地区外の幼稚園に通わせ、小学校では地域の学校へ通わせたときのお母さんの気持ちを教えてほしい

**報告者** 友達がいなかった私は、夫の妹が通わせた幼稚園が良いと思い通わせた。

その時にN先生に出会い活動し始めていくことになった。娘から、子ども会で保育園ができた経緯を学習し「友達は地区の保育園に通っていた、さみしい。自分も地区のほうがよかった」といわれた。自分が差別者だったと気づくことができたということもあり、幼稚園に通わせてよかったと

思っている。

**報告者** 自分は病気をしたこともあり香美市の応援団が来ている。N先生の出会いによって自分が変わっていったあたりを詳しく・・・

**高知** N先生は県教委にいらしたころ、41歳の時にくも膜下出血によってなくなった。結婚差別の実態について語ってくださる方を紹介いただいた先生。

**高知** 他地区との学校の交流会について補足。部落のある3つの地区が合同の学習会の一つとして5、6年が宿泊研修をしていた。その時には生き様学習としておとなが、子どもの前で体験を語ることを行っている。最初の時に比べ大きな声で「差別はいけない」と発表できる子どもたちになっていった。大人たちも力をもらえる研修となっている。

**鳥取** 演題の「部落に嫁ぐ」という言葉を選んだ理由はどうか？男性は嫁ぐとはいわない。なぜか女性がそのように言われる。嫁ぐは部落差別にもつながると感じているが。

**報告者** 今68歳、昔は嫁に行くときには嫁ぐという。部落に嫁いで、いいものいっぱい吸収したい。部落での生活は楽しかった。嫁いだが、変な意味はなかった。そこには差別も何もないと思っている。主人に嫁いで、部落に嫁いで幸せと感じている。

**高知** 討議の視点の5、「伝承文化」あたる発表であったと思う。フェスティバルで踊る踊りは初盆を迎えたご家庭で踊るといわれる。文化の伝承としてつづけている。が高齢化が進んでいる。地域の人たちのアイデンティティーにもつながる重要なものと位置づけている。

**熊本** 報告者のお連れ合いの出会いについて教えてほしい。

**報告者** 仕事は真面目、親を大事にしている男前。今日も誘ったが言ったら発言させると思ってかことわられた。

**高知** お連れ合いは、小学校時代には、差別語を赤裸々に、ぼそつと言う人。現実を直視した方だが、多弁ではない。報告者との出会いによって変わっていく。「差別するものとはつきあわない」といっていた人が学校にも出かけ、意見を言うまでとなっていく。

**高知** はじめは積極的ではなかった人であったが、報告者と出会って変わっていく。小学校にも出かけ自分の言葉で訴えていく。まさに地域の教育力だと思っている。

**高知** 本日の「部落に嫁いで」とい背景になった事柄を劇にしたと思う。初めて会ったときに、話してくれたことは、小学校の時に集金袋がなくなったときに先生から叩かれた体験があり先生が大嫌いになったとのこと。学校に出かけていく妻を本気でどなった経験がある。お連れ合いさんの

中では消化しきれていない出来事であり部落問題となっているが、自分なりに活動を地道にしている

**協力者** 今まさに、この報告により、私たちは「差別の現実」に学ぶことをさせていただいた。さらに人は出会いによって変わるんだということも教えていただいたと思う。では自分たちはどうかをこの後皆様からご意見をいただきたい。

また、「嫁ぐ」をキーワードに差別につながる意識についても問題提起をいただいた。

午後の意見交換につなげたい。

### Ⅲ 総括討論

4本の報告を受けてまずは、言葉の問題について「部落の人間になる」「部落に嫁ぐ」というあたりからご意見をいただきたい

**鳥取** 「部落の人間として認めてもらう」に認めてもらわないと活動ができない、生活できないという思いはなぜなのか？そこに同一性を求めているのではないかと感じるの、皆さんはどの様に感じるかを伺いたい

**協力者** 言葉の問題、文字が持つ問題というのは時間の経過ということも違ってきているが、言葉の持つ背景には深い意味があることを知ってほしい。そのうえで、変えた方がよいことは何らかの形に変えていくことも一つの方法だということをして社会教育の中で言っている。

**長野** 5年前に長野に引っ越し、解放子ども会にかかわる。ムラのおばあちゃんの話や聞くという企画があって、97歳のおばあちゃんがムラのことを初めて話せるようになったことが忘れられないと言っていた。

その生き方をすてきだと感じて、昨日の報告の「部落の人間になる」という表現は、部落の外から見ていたものを、部落の側からみて、大切な息子や奥さんを大切な人を見つけたというレポートだったととらえている、家族に対しての大切なメッセージではないか。

**熊本** その報告者に聞きたい。障害のある次男が生まれたときに顔の表情が変わったというときの気持ち、長男が弟さんのことをガイジと言われたときの気持ちを聞きたい。

**報告者** 次男、学校では先生方の手におえない状態で、特別支援学校を勧められた。支援学校に入ると地域の人たちが支援学校に通うと好奇の目で見られるが、子ども中心に考えると支援学校が良いという判断をした。

「ガイジ」とは障害児のこと。息子の友達が「ガイジと言っているのは弟のことだよ」と教えたことで、兄自身が、自分の過ちに気づいたと思う。

**熊本** その時の報告者の気持ちが聞きたい。

**報告者** 兄が弟に向かって言っている時には、自分自身もちょっと違う人間と思っていたのではないかなと思う。これからは、そんなことは言わせな

いと思っている。

**熊本** 奥さんが「あなたにはわからん」と言っていたことは、今言ったように報告者が「違うやつ」と思っていることと同じとを感じる。障害者差別と部落差別と重なる部分ではないか。解放運動として考えていかないといけないと思う。

**協力者** 違いを認め合うという、多様性を認め合うことが大切。

**鳥取** 個人的な問題ということではなく、社会のありようとして地域のありようとして、部落の人間になろうとしなければいけないのか。「部落の人間になる」という表現をさせてしまっているのではないか。社会の問題として多様性の現実を考えなければと思ったので、問題提起した。

**千葉** 若い時の恋愛経験の話だが、彼女に自分の職業を伝えたら、結婚は許さないといわれた。これは社会の問題です。

これは、部落の人間ではないと痛みはわからないのです。高知の報告者はえらい！がんばって結婚もされた。この人と思って嫁いでくれた。部落の人間として誇りに思う。

**熊本** 高知の報告者が、夫のことを笑顔で話されたのが素敵だと思った。自分は体が不自由であることで、4年間結婚を許してもらえなかった。同じ屋根の下で生活し自分を知っていくことでお母さんが理解してくれるようになった。理解しあうことが必要。

**協力者** 意見交換が偏っているの、人権のまちづくりに関して紹介できる活動があれば紹介してほしい

**兵庫** 公民館の事業の中で運営委員が、「自分は365日差別について考えなければいけないところから運営委員として出てきている」という言葉が金づちで殴られたような衝撃を受けた。今日、改めて感じた。今日の報告者の意見交換の中で、ふるさと教育を実行していくことにおいても、基本は人権教育かなと感じた。

**参加者** 「部落へ嫁ぐ」ということについて、議論が十分ではないと思っているが。「嫁ぐ」ということについて差別性はあるか？

**熊本** 結婚させることを「片づく」という言い方について議論したことがある。幸せな言葉ではなく、差別性があると感じたことがある。

**協力者** ことばじりを云々というより、物事をカテゴリー化してその中に入らないと繋がれない、生活しにくい社会の問題があるのではないかと問題提起だったと思うがどうか？

**千葉** 言葉の背景は様々、全同教は報告される事実と実践の中に部落差別の内実を見つけ、解消していく営みを学ぶことではないかと思っている。報告の中身に寄り添った、そんな議論をしたい。

報告者が挙げた「部落の人間になる」ということは、一緒に部落の課題を解消していく営みとし

てご理解いただきたい。

**高知** 人権確立まちづくりを議論する総括討議であるとおもう。

おとな集団の在り方が子どもたちを変えていくことをみてきた。保育者集団、おとな集団の関係性が大きく影響している。就学前のとても大切な時期。空気のように意識が刷り込まれてしまう時期だからこそ、そのまわりの先生方が高い人権意識をもって日々取り組んでほしい。あらゆる差別としっかり向き合うことをしていきたい。

**熊本** 両親は被差別部落に隣接していた村で生まれたので、差別意識を刷り込まれてきた。被差別部落の保護者から自分を育てた両親を否定してはいけない。あなたのご両親ならきっとわかると言っていた。その言葉から本当に解放されるべきは誰なのかに気づいた。差別をしている側が解放されないといけない。障害者問題も、障害者が解放されるのではなく、差別はする側が変わっていかねばいけない、解放されなければいけないと思う。

**千葉** 「部落のものしかわからない」について、自分は答えないといけないと思う。その気持ちにはなれないかもしれないが、少しはわかるように思う。ムラのひとから「部落の人はだめだと言われても言い返せない」と言われたが、言い返すとかではなく、何もしなかったのだと実感。差別に出会ったときには「棒のようになってしまう」という状況だと思う。

それぞれの生き方だと言えなかった自分の差別性があったと実感する瞬間があった。

千葉の報告者は、自分は差別者だったという報告で気持ちをひとつひとつ紐解いていくこと。その時の気持ちを受け止めていくことが必要と思う。

熊本の報告者の取組は、夢、理想であるということまで心打たれた。相模原の事件に対しての答えだと思った。その活動の源は何か？伺いたい。

**報告者** 本人の責任のないところで、地域の学校に通えない理不尽さや、憤りがあった。自分にはようやく生まれた子どもの3人目に口唇口蓋裂で生まれ、生まれてすぐから数回の手術をさせなければいけない状況があった。長男の「かわいい～」という発言に驚かされた自分は、違和感、偏見があったのだと実感した。

**香美町** 自分が閉鎖的な地域の中で逆差別ではないかと言われた時期があったが、活動を続けていくうちに、文化の伝承として秋祭りへの氏子が、部落の人は神輿が担げない時期があった。

自分たちの気持ちが伝えられる場を作ろうとしてきた。また、男子だけではなく女子にも神輿を担がせる機会を作った。そのことを機にマスコミが取り上げ、地域が男女差別解消への意識づけになったかと思う。差別はゼロではないが、薄まっているのは事実。

**協力者** 物事は正しく知って、正しく伝えることが大事。知ることから始まる学校教育の重要性。おとなたちが何を伝えていくかが重要

**兵庫** 部落差別のしんどさがわからなかったら運動はできないというのは違うと思う。

部落解放するのに、出身や、出身でないとかが重要なのではなく、両方が無知であるからこそ問題が残されていく。

部落差別を受けたかどうかでなく、そうでない人（「部落差別とは」を知らない人）を巻き込まないといけない。

自分は、言われたら言い返さないといけないと思っている。言われっぱなしになっているからなくなならない差別と感じる。

**協力者** 水平社宣言は人を尊敬すること…解放することと自覚している。最後に報告者の方に感想を

**報告者②** とても不安だった。本当の部落の人間とは何だと考えたことがあるが、わからない。現在進行形でまさに学習中である。

**報告者③** 誰もが願い込めてつけられた名前を、ヤマユリ園の事件では障害者の個々の名前で報告されず、ひとくくりにされてしまう。存在そのものを大切にできるように生きていきたい。

**報告者④** 病気になって、今日の報告が仕事としては最後となると思っている。15名も一緒に来てくれた仲間を財産として地域のおばあちゃんとして生きていきたい。

#### IV まとめ

子はかすがいがキーワードではなかったか

報告1は和太鼓活動の参加した子どもたちが、その活動の意義を知っていくアイディンティティに気づく営み

報告2は、自分の子どもたちを通して、自分自身を知る。意識に気づいて地域の人たちとかかわっていく営み

報告3は、障害のある子どもをとお母さんの意識を知る。地域の学校で学ばせたい

先生と繋がり、学校と繋がる、行政と繋がるという実践

報告4は、まさに子ども会活動の子どもを守る会から育てる会へと変更する営みには、人や地域を変えていった。

伝承文化は次の世代への継承である。

少子化の中のこの活動には大きな意義があるということが共有できた。

伝承文化に光を当てて子どもたちへ伝える。

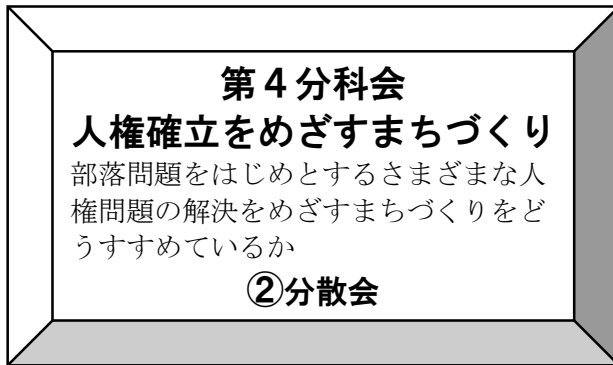
地域の中で子どもを育てることの意義も確認できた。

空気のように差別は刷り込まれていく、だからこそすべての人に差別に打ち勝つ力をつけることは必要。それが今日はそれが浮き彫りになって明日へのまちづくりにつながっていく。

障害のあるお子さんのお母さんの言葉として「保護者席から初めて自分の子どもの運動会を見たのが新鮮」…地域で子どもが育つ当たり前の社会をつくっていきましょう。

一人ではできないことは複数で取り組み、来年へつなげていきましょう。

若い方を連れてきていただき、次の世代へもつなげていきましょう。



## I はじめに

分科会「討議課題」を共通理解した後、当分散会で大切にしたい視点「①部落差別をはじめとするさまざまな差別に、また、差別の現実はどう向き合って生きてきたのか、どう行動してきたのか。②さまざまな工夫をし、活動を進めているなかで、差別に対する思いがまわりはどう届いているのか。③組織として取り組んでいることに、どのような思いや願いを大切にしているのか。」と提起し、報告、討論に入った。

## II 報告および質疑討論の概要

### 一報告1—①

#### この村に嫁いで…(あれから50年)(熊本県人教)

報告者は結婚して被差別部落で生活するようになって50年。学習会で学ぶ子どもたちの姿を通して、家族が差別で苦しむことがないよう願い続ける。夫の運転免許取得の過程を通して、差別の理不尽さを感じながらも夫を支える。免許取得後は、生活も安定し病気の治療費や子どもの教育費も賄うことができ暮らしも大きく変わった。

現在は、おしゃべりと笑いで出合いを重ねることが生きがいであり、その営みの中でムラに生きる誇り、ムラに嫁いできたことに喜びを感じている。

#### 一主な質疑と意見—

**愛媛** 大阪のご両親は結婚についてどのようなことを言ったか、また思ったか。初めての部落差別の闘いとあるが、それ以前は感じなかったか。

**報告者** 両親にだまって結婚した。当初は熊本に位牌を持って行ってすぐ帰るつもりであった。周りからの結婚の勧めにより、自分で決断した。両親には事後承諾を得た。差別については、周りのみんなが言わないので、その時は感じなかった。

**愛媛** 娘さんは学校で同和教育を学んだと思うが、いろいろ差別があったという話は聞いたか。

**報告者** 娘は小学校、中学校の時から解放運動の活動に参加し学んでいる。自分は娘から聞いてだんだんと分かっていった。夫からは差別について聞いていない。結婚した時、夫は解放同盟会員であり、自分はどうすると聞かれたが、一緒になったのだからと承諾した。それ以外は分からなかった。

**三重** 夫の免許取得に際して、協力したのは友人のヒロキさんだけか。文字の読める報告者は夫婦として協力したのか。

**報告者** 夫と自分と一緒に運転免許試験を受けたが、自分が先に合格した。夫はプライドが許さないのか私には援助を求めなかった。ヒロキさんだけが協力した。

**兵庫** 自分は報告者と反対で差別から逃げていた時期があった。〇〇といえ、名前や地区がすぐ分かる。自分はそのことで誹謗中傷を受け、やけになった時期があった。しかし、今では解放運動に積極的に参加している。自分がそんなことをするから差別を受けると指摘され、家族や兄弟は理解してくれないが自分は今からも闘っていく。今日の報告を聞いて勇気がわいてきた。

**奈良** 報告者がムラに誇りを感じるきっかけにもなった人権劇のことについてももう少し詳しく説明してほしい。

**報告者** 熱心に取り組んでいる学校の先生にお願いしたい。

**熊本** 人権劇は今年で8年目である。子どもたちが聞いたことを劇にするが、自分たちの住んでいる被差別部落の中の人を主人公である。子どもたちは演じることで、その人の想いを想像する中で差別の現実を学ぶとともに、たくましく生きていく人を通して、ムラに誇りをもてるようになってきている。中学校への繋がりから5・6年生も参加している。

**大阪** 自分たちの住んでいる地域はロールモデルを感じる事ができにくい。今日の報告を聞いて地域のよさ、温かさを感じた。大阪でも実践していきたい。このムラが大好きとあるが、ムラのどこが、どうしてそう思うのか。

**報告者** 熊本の人は優しい。困った時に助けてくれる。人と人とのつながりがある。

**愛媛** 一生懸命取り組んでいるのは、差別を受けた人や地区出身の先生である。それ以外の人や教員はどうであろう。当事者だけの問題になってはいないか。みんなのものになる必要があるが、熊本ではどうか。

**熊本** 地区のあるなしにかかわらず同和教育は行っている。生の声を聞きやすい学校、リアリティがない学校さまざまではあるが、部落問題を核にしており、共通教材も使用しながら学習してい



る。子どもたちに学びたい、子どもたちのことを知りたいという教員も増えてきているように思う。

#### 一報告2—⑨

##### 市民一人一人が人権意識を高める組織へ

(愛媛県人教)

四国中央市は2市2町が合併してできた。統合前は行政区域ごとに人権・同和教育の取組や考えの違いがあった。2007年に市内4支部を統合し一本化を図った。考えに相違があれば前に進めない中、「教育を差別の現実学びながら進めていく」という方針で共通理解を図っている。人権教育協議会が中心となり、就学前から社会教育まで市内統一した人権・同和教育を推進している。行政職員として人権課題解決に向けて中心になって取り組んでいる。

#### 一主な質疑と意見一

**愛媛** 素晴らしい発表であった。愛媛県は東予・中予・南予に分かれているが、四国中央市のある東予は愛媛で一番取組が進んでいる。行政と協働することが一番重要と考えている。自分の住む南予は遅れていると思う。四国中央市に一步でも近づけるよう頑張る。

**愛媛** 企業の研修について聞きたい。動員等による研修がよく見られるが、うわべだけの研修になりがちだが、研修のあり方についてももう少し詳しく聞きたい。

**報告者** 自ら出向く研修と依頼があれば出向く出前講座がある。研修会の持ち方を変え、身近な問題を提起することにより、参加者が増えた。企業側の立場では、時間的な制約があり、こちらからは行きにくい。来れる時にきてくれるとありがたいという意見があった。40分でも20分でも10分でもこちらから足を運んでいくことが大切だと考えている。

**鳥取** 就学前、新規採用等職員の年3回の研修で理解できたか、深まりはあったか。

**報告者** すべて網羅しているわけではないので3回ではむづかしい。理解を深めるためにフィールドワークを取り入れている。実際、生活環境等を自分の目で確かめてもらう。また、被差別の立場の人の話を聞いて、自分の問題として捉えられるようにしている。若い先生が多くなり、意識の違いは実感している。3回の研修をきっかけにして、それぞれの職場で研修を深めてもらいたい。ねたみ差別などの間違った考えをなくすためにも、正しい知識、理解が必要である。

**愛媛** 報告者が発表したのは人権教育協議会が取り組んでいるものである。これだけでは十分ではない。教職員は、差別の現実から学ぶということで、隣保館研修にも参加している。人権教育協議会は学校、行政、運動団体等で組織されているので、さまざまな立場からの研修ができる。

**京都** 自分は啓発に関する仕事をしている。ケーブルテレビを利用した教育・啓発の発表があったが効果や成果がどれくらいあったか話してほしい。

**報告者** はじめてから1年であり試行錯誤しながらなので、具体的な成果は十分把握できていない。しかし、研修会でケーブルテレビを見たとか、その内容が話題に上がることもある。これがすべてではないが、成果の一つと考えており、もっと広めたい。今後、子どもたちに劇等で出演してもらい、子どもの頑張りを通して、家族や大人への啓発になればと考えている。

**愛媛** 公民館や集会所で講座を担当しているが、参加者の減少や固定化、60歳以上の人が多い。30代40代対象の個別の研修内容等があれば教えてほしい。

**報告者** 年齢層個別のアプローチはしていない。今はすべての年齢層の人が対象である。意識調査からも若年層への啓発の重要性は感じている。今後検討していきたい。

**大阪** 都市も地方も頑張っている。今回の報告もよかったが、今までいろいろな人が啓発を行い、よい取組をしてきたのにもかかわらず尻切れとんぼになってきた。そんな中、ねたみ差別や逆差別がずっと出てくる。いいことをしているということだけを前面にたてることではいけないと思う。自分も反省するところではあるが、被差別正義、差別されている者が正義で、我々が言っていることが正義と捉えているのでは話にならない。ねたみ差別意識をもっている人と本音を出し合い、なぜかとじっくり話し合える懇談会ならば成果はある。差別はだめと、初めから答えを出しているのでは成果は上がらない。我々も含めて大きな課題だと思う。

**熊本** ケーブルテレビでの啓発の報告があったが、若い世代はネット等で情報を得ている場合が多い。ケーブルテレビ以外で啓発手段があれば教えてほしい。

**報告者** 現時点ではネットではしていない。ケーブルテレビも全世帯が加入しているわけではないので、全員に情報がいきわたっているわけではない。今後インターネットの啓発も検討してみたい。

#### 一報告3—⑥

##### わたしが選んだふるさと

(島根県人教)

地区内の休耕田で、住民と子どもたちとで花壇づくりを行い、体験を通して部落差別の解消を子どもたちに託す住民の活動をはじめた。また、行政や住民が障害のある家族の困りごとに気づくことの事例から学んだこと。また、県外から嫁いできた報告者が身の周りで起きるさまざまな差別事象を通して、人の心の冷たさ、温かさ、強さ、変容等を感じてきた。定年退職後、隣保館職員と

して勤務する中でふるさとのよさを再発見するとともに、ここで力強く生きていこうと決意している。

#### —主な質疑と意見—

**大阪** 60年前、この小さな混住地域で隣保館を建てたとあるが、それは被差別部落であると名乗ることにもつながると思うがスムーズに運んだのか。また、運営は被差別部落の人だけか、それ以外の人も含まれているのか。

**愛媛** 行政職員である報告者は同和教育の研修はあったのか。また、隣保館職員として地区外の人はどういう思いだったのか。

**報告者** 当時の話として、同和地区（現20世帯）の中に作るのか、今の所（地区外）に作るのか両方の意見があった。同和地区に作ると地区の人だけが利用することになり、差別が助長されると考え、地区外に建てればみんなが利用できるという意見でまとめ、現在の場所に建てられた。地区外の人喜び、建設時もみんな協力した。自分は直接差別を受けることは感じない。運営には地区外の人も入っている。

職員研修は数多くあり自分も受けてきた。隣保館で勤務しようと思ったのは、自分の住んでいるところが同和地区であり、そこに住んでいるみんなが強く生きており、自分も一緒に強くなりたいと思った。また、自分も一緒にできることはないかと思い勤めている。

**愛媛** この地区では、被差別部落とその他の地区の人の生業の差は遜色ないのか。

**島根** 島根は少数点在が特色であるが、この地区は県下では大きい地区であり、初めて隣保館が建設された地である。当初建設された時は、小学校の附属体育館という位置づけであった。私もこの地区で生まれ育ったが、同和地区だと差別されたことはない。しかし、結婚だけは別だと感じる。大学卒業であり、行政職員であるにもかかわらず、自分には見合いの話はなかった。

歴史をさかのぼれば、海運業や治安維持の職種にかかわっていたが、現在の職業は地区内外同じであり、特殊な仕事をしているわけではない。

**兵庫** 私の住んでいる地域にも被差別部落があるが、みんな知っているが隠しているのが現状である。家族も言わない。

**報告者** 当初、嫁ぎ先が同和地区とは知らなかった。半年後、祖父の葬儀に際して花輪を見て親族の一人が葬儀終了後すぐに帰宅し、10年間音沙汰がなくなった。それを契機に同和地区であることを認識した。そして、不安を抱えながら実家に電話をした。父は「仲はよいか」「お父さんやお母さんに大事にしてもらっているか」と聞かれ、「はい」と答えると、「それ以上何を望むことがあるか」と言われ、心の整理ができた。

疎遠になっていた親族も10年後にはつきあ

いが再開した。きっかけは、子どもが大学に行くようになり、家を訪問するようになったことを両親が知ったことである。

**愛媛** 自分は被差別部落出身であるが、子どもの時に自然に分かってきた。この大会に参加している人たちは差別する人ではないが、差別は現在もある。心の中で思ってもよいが、差別しないほしい。

**兵庫** この大会に参加していない人が圧倒的である。問題は出てこない人であり、差別する人が現実にいることである。

**大阪** 昨今の全同教では、地域に誇りをもつという趣旨の発表が多い。誇りを感じた人が大きくなり、誇りをどのように発散するか、どう立ち向かえるかが問われる。誇りと名乗りがつながっていただなければならない。部落の中にいると差別はないが、外に出ると必ず出会う。隠すと必ずあばく人間がいる。地域を言われても立ち向かえることが大切である。

**報告者** 自分の子どもに対しては何回か話す機会があった。小学校高学年の時、学校で習ってきて、「同和地区はどこ？」と尋ねられた時、「ここがそうだよ」と答えた。大学に行く時や就職時にも、ふるさを隠さずに堂々と話し、生きていくように。結婚時は、娘から相手に、もう話しているとされた。堂々と同和地区に生き、隠すことではないと思う。

#### —報告4—

#### 民設置民営の隣保館の挑戦～「忘れてはならない自主解放」の精神を胸に～ (大阪市人教)

同和地区内に設置され、識字学級など人権文化センターなどが、市政の見直しにより、予算の削除等の同和行政の後退によって閉鎖された。そこで、地区住民の力で地域活動の拠点となる民設置民営の隣保館を開設し、自主解放の精神で人権尊重の町づくりに取り組んでいこうとしている。設置してから1年が経過したが、持続可能な運営を模索し、成果と課題を検証しながら挑戦を続けて、全国に発信しようとしている。

#### —主な質疑と意見—

**鳥取** 建物の壁面にある母子像のオブジェと「おがり」の意味を教えてください。

**報告者** 沖縄の金城さんが制作した像である。町づくり運動の中でムラの人と金城さんが知り合いになり、話し合う中で部落解放への壁画運動として取り組むようになった。「おがる」というのは、大声で叫ぶという意味であり、解放に向けて「おがる」、差別に向けて「おがる」という気持ちが込められている。

**滋賀** 自分のところの隣保館活動の対象は地区の小・中学生であるが、住吉では、地域外の子どもの参加についてはどうか。また、子どもに部落問題をいつ、どのように伝えるのか。

**奈良** 奈良では老朽化による統廃合が行われている。住吉では自主財源を有しているとのことであるが、年間数千万円という運営費がかかるが、長期的な展望で、どう運営されているのか。また、活動の参加費徴収と市への活動に対するアピールはどうなっているのか聞かせてほしい。

**愛媛** 子どもから500円徴収するのは疑問に感じるがどうか。また、行政からの補助はどうか。

**報告者** 詳しい数は把握していないが、地区の子どもと地区外の子どもは半々くらいか、むしろ地区外が多いのではないかと思う。

部落問題についていつ、どのように教えるかについては、最初は小学校3年生で「自分たちの校区を知ろう」という学習をする時である。小学校6年生では部落問題を入れる。中学校は2つの小学校から登校してくるが、1つの小学校には被差別部落がない。そこで、ここが部落であることを教える。学校で水平社等の学習はしているが、他人事ではなく、自分たちの問題ということで捉えてほしいと思っている。

運営については、家賃等の自主財源は有しているが、助成金等を申請している。しかし、継続的なものではないので、事業予算をつけてもらうよう準備も進めている。住吉では結果的に民営になっているが、本来は行政がやるものと思っている。行政の首長が変わると根本が変わることを大阪は経験したが、活動拠点がなくなることが一番困る。自分たちに何ができるかが問われている。

食事が満足にとれていない子どもは把握している。9時から15時までの活動を無償でボランティアとして参加している現状がある。徴収額等については、我々の中でも議論をしながら進めている。なんでも無料ということがいいのかどうかも含めて、現在500円に設定している。

**兵庫** 「忘れてはならない自主解放」のおもいをどのように捉えているのか。住吉からの発信を期待している。

**報告者** これを書いたのは自分の祖父である。当時は、部落解放運動が現在のように昇り調子になることは想像できなかったと思う。そんな時期にこの言葉を書いた祖父は、自分で言うのもなんだが、先見の明があったのだと思っている。

この活動を持続可能なものにしたほしい、第2の民設置民営が出てほしい。住吉の取組を全国に発信するためにこの大会に参加した。また、次年度の滋賀大会で機会があれば、報告したい。

**大阪** この言葉をかいた人は自分の父であるが、運営は地区で住んでいる人が当たらなければならないという信念があった。公設置公費はよいが公営ではだめで、民営でなければならない。責任の問題等があり、民営はハードルが高いが、実際にやってみると効果が大きい。年間休みは年末年始の3日間だけであり、いつでも地域のニーズに

応えることができている。先人は「教育に始まって教育に終わる」という信念のもと、自分たちの子どもには高校に行かせたいと願っていた。その子どもの世代が一番高等教育を受けている現実がある。自分は、民設置民営はよいとは思わない。公設置でもいいが、民営の意識が必要である。

**三重** 自分のところは3年前に隣保館を建て替えた。それによって活力も生まれてくると感じている。これは、市長の判断である。このことから、行政のトップの決断でどうにでもなると思っている。大阪の取組は素晴らしいが、地方ではできないと思う。地域の実情によって違うが、地域によって模索する必要がある。自分は、隣保館が必要なくなるように取り組んでいる。差別を引き継がないように願っている。

### Ⅲ 総括討論

次の4点について確かめ合った

1点目は、同和教育の継続と再構築である。

法が失効して14年。人権教育の中で部落問題が薄れてきているのではないかと。同和行政が後退しているといわれる中、大阪の報告にある隣保館事業の変容や学生の意識調査において、「知らない」「分からない」が多くを占め増加傾向にある。また、啓発も「自分はしない」ということで終わってはいないだろうか。具体的事例を通して、部落差別の現実から学ぶことが問われている。また、市町村合併により、愛媛の報告のように新しい行政機関が生まれた場合、旧行政の取組の差異により、共通理解を得ながら共通歩調で取り組まなければならないことの重要性も確認できた。

2点目は、家族や地域のつながりの重要性である。

熊本と島根の報告からは、日々の生活の中で差別による生活の実態を家族との対話を通して認識をしたり、成長できたりしたことを確認できた。その中で一番身近な家族や友に自らの思いを素直に発露できず、葛藤する姿にこそ差別の根深さがある。これらのことを克服しながら自分のふるさとを好きになり、ここでムラのみならずずっと暮らしたいと胸をはって言える自分があることを通して人としての成長や充実感を確認できた。

3点目は、行政や学校等の連携の大切さである。

熊本の報告では、学校での人権劇を通じた取組を通して演じる人の心を想像したり、自分を高めたりできた。愛媛は学校や市民対象の社会教育における行政の取組を通して教職員や家族が核になり人権意識の高揚を図っている。島根は休耕田を活用した隣保館活動等を通して人々がつながり広がりを見せってきた。反対に大阪では、市政の見直しによる行政の後退により民設置民営の隣保館事業を推進しているが、設置に伴い先人の意思を受け継ぎ取り組み、新たな連携を生み出して

いる。また、こういう状況であるからこそ行政との新たな連携を模索する必要もあるとの認識も共有できた。

4点目は、地域の実態に合わせた取組の必要性である。

少数点在の被差別部落、一方では人口や戸数も多数の被差別部落、また、歴史的な環境や生業等地域によってさまざまである。差別解消に向かう目的は共有しながらも、地域の実態に最も適した効果的な手法をとることが必要である。そのために、全国の取組を学び、そこにいる人々の思いを自分のこととして消化して、よりよいものに再構築しながら明日からの自分たちの実践に生かしていくことを確認できた。

#### IV まとめ

事実と実践を大切にした論議が進められた。その中で、自己解放に向かう同和教育の営みは、日々の暮らしの中で時を超えて、世代を超えて、脈々と引き継がれていることを確かめられた。また、同じ立場であっても、同じムラに住んでいても、自分の心を解放することにためらいが生じるのも差別意識の恐ろしさがある。人と人を離していく怖さであり、今も昔も変わらない現実ではないか。どんなに社会の中に支援のシステムが整備されても、そこに関わるのは人である。その人がどこに立って何を大切に生きているのかが問われる。差別を解消していくための差別のおかしさを共有し、立ち向かっていくための学習が人のつながりをつくる学習になってきたのかという課題も見えてきた。

部落差別解消推進法が施行されて1年。地域の拠点となる隣保館の存在が危ぶまれる昨今、民設置民営の取組は、これからの新たな挑戦として報告されたが、全国各地、地域の課題はそれぞれである。地域のニーズに合わせ実態に合わせ、したたかに生き残っていくための大きな提起となった。

ふるさとを誇るとは、ここで生きてきた人生を、ここで生きることを、出会った自分をよかったと自分の生き方を肯定できることではないかということ会場を共有し確認できた。

**第4分科会**  
**人権確立をめざすまちづくり**  
部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか

#### ③分散会

## I はじめに

すべての人が安心して生活できるまちづくりのために「さまざまな立場の人が出会い、その実現に向けての課題や願いを明らかにしていく学びの場をどのように創りだしていくか」、「その学びを地域の願いの実現や課題克服のための役割分担と協働にどのようにつないでいくか」という討議の方向づけをし、報告討論に入った。

## II 報告および質疑討論の概要

### 一報告1ー⑦

**みんなで“まなび”を愉しむっちゃ！～霧岡小学校PTA人権教育委員会の“まなび”について～**  
(福岡県同教)

#### 一主な質疑と意見一

**徳島** 具体的な実践の内容を報告文書に沿って聞きたい。

**報告者** 霧丘小学校は被差別部落の人たちも含め思い入れの強い学校。部落の人たちがここで生活をし、厳しい思いをして改善事業をし、まちづくりをやってきた。同和保育所はムラの人たちは2年も3年もかけつくった。ムラの子どもたちは10人だが、いろんな人たちが保育所を利用している。解放運動によってみんなが恩恵を受けている。もう1回学び直そうと、まちを歩くことから始めた。

最近では、ジェンダーの問題やシングルマザーについて学習会をしている。市民センターでの毎月1回講座で地域問題やシングルマザーで学んだことを発信している。委員会は昼間は仕事があって参加できないが子どものために何かやりたいと思っている人がたくさんいるので夜開いている。今年は映画会『みんなの学校』を企画し上映した。主体的にやり遂げていくことを大事にしている。

**徳島** 差別をなくすために頑張った地域についてPTAに分かってもらうにはどうしたらいいか。

**報告者** 改善事業でのまちづくりが校区の様々な人たちにとってプラスになっている。水道要求闘争や隣保館機能を持たせた公民館づくりなど毎月開かれている講座で、ムラの思いや運動により人権のまちづくりになっていっていることを報告している。

PTA向けには今年36回目の講演会をした。解放運動の側もずっと下支えをして、人権のまちづくりを広げている。人権委員会の出発点は、1970年代に子どもが入学する被差別部落のお父さんがPTAの副会長になり、同推委員会をつくった。それが今も続き、様々な人権課題に取り組んでいる。部落解放運動が原点にあり、学びが続いていることを話し込みながら輪を広げている。

**奈良** 地域の取組を学んで広げていくことはよ

く分かる。シングルマザーの問題とか非正規の問題とか、一生懸命取り組むことで、子どもの貧困の問題とか社会問題に通じ、人権意識は、そのことを通してだけでも十分広がっていく。なぜ部落問題を重ね合わせるのか。

**報告者** 部落問題を外さないようにしている。解放奨学金が一般化され奨学金が借りやすくなった。奨学金を借りてきたのはこのAさんやYさんも同じ。奨学金の拡充によって部落の子どもたち以外の多くの子どもたちも奨学金を借りられるようになった。AさんやYさんも含めて部落解放運動と具体的な形で自分たちはつながっていることを実感させるようにしている。

1982年に小学校の教員になり、最初に出会ったのが被差別部落の子どもがいる学級だった。家の中で何かあったら連絡帳持ってくるという指導をしていた。ところが学級の中には、親が字が読めない書けないという子がいた。半年間気がつかないまま過ごし、ムラの保護者から差別教員やと鋭く突かれたことが今の出発点だ。学級集団づくりは、子どもたちの人権課題を見据えながら取り組んできた。部落出身、在日、シングルマザー、生活困窮者など様々な人権課題がある。それぞれの課題を見据え、寄り添うことが教育・啓発には大切だと思っている。

#### 一報告2-⑪

#### 一人ひとりが幸せを実感できるまちづくり

(香川県同教)

#### 一主な質疑と意見一

**兵庫** 保育所、幼稚園等関係者がたくさん学習会に集まってくれているが、参加者が固定しているという大きな課題がある。教材や参加者の状況、課題は何かということを教えてほしい。

**報告者** 参加者は、公民館に来ている受講者15名程度。高齢者が主。昼間の開催であり若い人の参加が難しい。内容は講師の先生にお願いしているが、難しい話はさけて、家庭の男女共同参画の在り方等や、身の回りの身近な問題について話してもらっている。

**香川** 三木町では町をどうよくしていこうか、幸せなまちにして行こうかと、身近なテーマを掲げて公民館利用者とか周辺地域の人たちに来てもらっている。テーマによって、内容を工夫している。

**奈良** 2016年に人権推進室が立ち上げられるまでの経過と、2013年に「三木町人権・同和行政基本計画」が策定されているが、あえて「同和行政」という言葉が使われているのは、同和対策が十分なされないままで、今から推進していくということなのか。「現地研修」がどの程度の頻度で行われているのか。センター連絡会の成果についてもっと詳しく知りたい。

**報告者** 現地研修は町内の保幼小中高も含めて

年に1回開催。センター連絡会では、各取組を発表し、意見をお互いに出し合っている。今年が発達段階に応じて、教育に一貫性ができるように一連の流れを一つの表にまとめる作業を行っている。人権推進室は、2013年以降人権の部門が、町長部局の住民生活課と教育委員会の生涯学習課に分かれていたのを一つにまとめた。

**香川** 三木町教育委員会から。同和行政基本計画は一般施策に切り替わり、重点的に整理して作りあげた。一般施策として力を入れて行こうということで推進室も立ち上げた。三木町の最大の課題は参加者の固定化、高齢化。地域の人、行政、学校現場だけが一生懸命になっているが、大多数の住民が無関心になりつつある。どう取り組んでいくかが課題である。

**兵庫** センター連絡会について詳しく教えてほしい。幼保小中高の異校種間の連携、一貫した同和教育、さらに行政と学校との連携もとれている。発達段階に応じて、段階的な同和教育の系統性があるのかどうか。高校卒業時の目標に向かってそれぞれどう取り組んでいるのか。

**香川** 三木町は行政が小さいので小回りがきく。センター連絡会は教員にとってすごく勉強になる。高校の人権・同和教育を担当していて気づかない部分そこに気づかせてくれる。いろんな問題を考え学校に持ち帰り整理してフィードバックできる。人権・同和教育を進めるうえで力になっている。

**香川** 小学校教員として研修に参加している。びっくりしたのは行政の人の顔が見えること。一緒にやっているという気がする。人権集会や研究授業もセンター連絡会が核になっている。教員では気づかない指摘やアドバイス、励みをもらう。ありがたい体制だ。

**香川** 現地研修はDVDを使って部落問題を中心にセンターで実施。地元の方を中心にグループワークで意見交換をし、学校での公開授業に地元の人が出向く。現地研修の学びが学校現場でどう生かされているのか確認できるサイクルで取り組んでいる。差別の現実、部落問題で苦しんでいる人の不安な思いに気づいてもらえるように研修の場で伝えている。

**奈良** 大和郡山市では推進協議会が中心で、行政主導で行われていることがすばらしい。

**奈良** 解放運動や同和教育運動の成果を身近な問題としてどれだけ多くの人と共有できるかという課題がある。教科書無償は高知県の長浜という被差別部落から起こった運動で全国に広がった。同和教育運動、解放運動の大きな成果だ。人権3法をいかに身近な問題として確認してもらうかという大きな課題が残っている。

### 一報告3—⑫

啓発チーム力～話題性あふれる問いかけを駆使して～  
(奈良県人教)

#### 一主な質疑と意見一

**徳島** 地区懇を実施するに当たりどのように周知しているのか。

**報告者** 校区人推協の事務局が小学校区にあり、地域毎に総会を開き、日程を決め10月から11月にかけて全ての校区で行っている。市の職員の研修を2回に分けて事前に行い、役員会で周知徹底できる。PTAの役員会にも出向いて直接話をする。市の広報誌も使う。

**兵庫** 子育てをしているお母さんへの呼びかけ方法。小中学校の先生の参加の工夫は？

**報告者** 子どもたちの参加オッケーということ必ずいつている。大人の元気に真剣に勉強する姿を子どもたちは感じる。PTAのなかに人権部の残っている校区の保護者は来てくれる。

**鳥取** 楽しいだけでは部落差別はなくならないと思っている。奈良県では地区懇のやり方を工夫することで参加人数も増えているということだが、部落差別の実態についてはどう変わったのか。

**報告者** 一番重要な部落問題は絶対に外さない。教え子の結婚差別のこと、その前後の友達の励ましを地区懇の終わりに話している。最後に人権アドバイザーに10分間話してもらう。

**奈良** 大和高田市人推協。部落問題が見えにくくなっている。差別しなかったらいいという意識が多くの参加者の中にある。差別をしなければいい問題で終わってはいけない。

**鳥取** 米子市でも意識調査をしているが、地区懇で人数も増えている中で、部落差別をなくそうという住民の意識がどれくらい変わってきたのか。

**報告者** 毎回各校区でアンケートをとっている。市民の意識調査をやって来年の地区懇を想定しようという案も持っている。客観的なデータと具体的な事実の両方を持ち合わせることは大事だ。

**香川** 三木町の取組も部落差別の解消からすべての差別の解消につながっていくと考えている。参加した人が聴いて良かったと思える取組を進めている。

### 一報告4—⑤

誇りうる伝統工芸『竹細工』を紡いで！～師匠と歩みし日々は 走馬燈～  
(島根県人教)

#### 一主な質疑と意見一

**兵庫** 竹細工と学校との関わりで、部落問題との出会いとか子どもたちに部落が支えてきた社会の役割というのをどのように話しているのか。子どもたちはどう認識してどんな思いでいるのか。

**報告者** 部落問題と子どもたちとの関わりはあまいと感じている。昔の文化を伝えることを同和

問題の入口にしたかった。竹細工の過程を追うだけでも多くのことに気づく。中学校で竹の特性紹介し、竹細工に関心を持ってもらえと思うが、発展途上で先は見えない。

**福岡** 小倉では竹細工が部落の生業だ。今の時期はしめ飾りをつくり、20数年前から授業にしてきた。部落の中に祖父母に育てられた女の子がいた。秋の今くらいに「先生昨日山に行った」と言った。紅葉狩りにでもいったと思い「よかったね」と言ったら「先生何も分かってない。辛かったんよ、悲しかったんよ」と言う。祖父母が、しめ縄をつくるために山に登り、しめ飾り用の木の実を採っている時に下で待つ。小学校1年生で、その手伝いもする。両親が離婚して悲しい思いをし、祖父母が苦勞している。この子が親のこと部落のことを憎むようになってはいけない。そんな思いでしめ飾りの授業をした。今も授業は続いているが原点の話ができていない。しめ飾りの学習には、部落差別の現実があり、人間のやさしさに出会い、寄り添いながら教材化していくことが大切。竹細工にも部落差別の現実がある、そこを学校の教員は学んでほしい。

**奈良** 島根県の西部は竹が部落産業。なかなか語ってくれないがどう語ってもらうのが我々の重要な仕事だ。竹細工は被差別部落の極めて優れた文化で被差別部落の中で力を合わせて技を伝え合っていた。師匠に自分の差別性、悩みの相談をしながら本音を少しずつ引き出ししていき、被差別の重要な文化だということ風化させてはならない。

**報告者** 自分の中ではCさんがいたから今もずっと仕事を続けられた。お通夜でのあいさつを頼まれた。ありがたい気持ちと私でいいのかという気持ちがあった。以前私を紹介する時「わしの友達じゃけえ、わしの息子みたいなもの」と言ってくれた。私のことをそんなふうに見てくれていたことを思い出した。また、地元の誇れることを絵本にしようと準備をしている。そういったことを通して師匠とのつながりだけでなく竹細工とのつながりを話す機会があった。そういうところで力をもらった。

**徳島** 地域に太鼓をつくる伝統産業がある。教材化しようと教員で知恵を出し合った。理科の先生が牛の生の皮を革にするなめしの作業をした。顕微鏡で見ながら、革にするのがどれだけのすばらしい技術かということ科学的に教材化した。音楽の時間に教材として扱い学校の教材になった。教材にして教師が語る時、そこは地元で聴いて学んでおかないといけない。

**報告者** お寺に長いことあった古くなった太鼓をもらい受けて修復した。修復する時は行って写真に撮るなど地域文化として記録を残している。竹細工も太鼓もどこかでドッキングできないか

と考えている。学校での教材化に向けて少しずつ進めてきている。

**島根** 江津市、浜田市で一緒に月に1回研修している。報告者に江津のフィールドワークでお世話になった。2005年に竹細工をスタートさせた年に担当になった。報告者が熱心に取り組み広がっている。江津の駅前に地域の産業を展示している所に竹細工があって、これ報告者が活動してきた成果だなと感じた。竹タックの会というのがあり、広がりも感じている。

### Ⅲ 総括討論およびまとめ

2日目の午後参加者が20名程度に激減したため、車座での総括討論となった。討議の柱に沿って課題を明らかにするところまでは深められなかったが、それぞれの地域で実践している人権のまちづくりについて取組が交換しあえた。

#### ～主な意見～

**島根** 日露戦争時代、ロシアの輸送船が沖合で沈没しそうになり、ボートで陸に向かってきた敵対関係にある乗組員265名全員を漁師たちが中心になって助けた。そのことを絵本にして地域の財産として伝えようとしている。その後毎年交流が行われ150周年記念事業へとずっとつながってきている。

**兵庫** 差別のない地域づくりとして、地域に根づいていた芝居の文化をつないで、1990年から毎年小学校区の文化祭で演劇活動を続け、命と人権の大切さを伝えようと手づくりで取り組んでいる。

**福岡** 小倉には「口説き」という盆踊りがある。文字を持たない人たちがムラの中で伝えてきた。ムラには思いの詰まったものがいっぱいある。文化創造として残したいとCD化し教材化し活用している。

**熊本** 劇を通して人権の大切さを伝えようと劇団を地元でやっている。当初は、同和教育担当者の学習会から始まった。地域で話せる人材育成として、10年ほど学習を積み重ね、寸劇を取り入れ地域に入った。2、3年して、部落問題を解決するために始めたのにそれに直結していないことに気づいた。学校では学年に応じた学習を積み重ねて6年生が人権フェスティバルで人権劇をやった。教員の聞き取りを劇にして地域に伝えていった。大人も光座を立ち上げ、小国の解放運動を劇にして伝えることで誤解や偏見が払拭されていった。

**島根** 人権のまちづくりのキーワードは「ほこり」。太鼓をたたくことが目的ではなく手段。地域に誇りをもって、地域を笑顔にする。演者以外の人もそれぞれ役割を持って取り組んでいる。自分は手に障がいがあるが役割があり安心して参加できる。居場所があり居心地がいい。

**滋賀** 隣保館に勤めた5年前、地域とうまくいか

ない時期があった。まちは造り替えられて綺麗になったが、隣の家が遠くなり、人と人の関係が弱くなったと感じた。地域を歩き、おいちゃんおばちゃんと話すことからつながりをつくる。隣保館に来てもらい、話を聴く中で地域には産業がなく日雇いでいろんな仕事をしていたことが分かり、差別の現実が見え始めた。人権のまちづくりのベースの「顔の見えるつながり」、「居場所づくり」は簡単ではない。地域に入っていくといけな

い。討論の最後に、島根県雲南市からの84歳の参加者から夜の啓発活動に積極的に出かける話があった。前向きな姿勢に力を頂いた。一方で被差別の当事者として第一線で頑張らないといけないという現実があることを深刻な課題として受け止めたい。

また、若手の香川の報告者の2日間の振り返りで、報告することで地域の人のあたたかい思いを再確認し、確かなつながりを感じることができたことで啓発・交流に取り組もうという思いをさらに強く発言できたことが、参加者の共感を得た。

最後に、学ぶ場が少なくなってきたということは、本当のことを知る場が減ってきたということ。本当のことを知って誰に伝えるか。まず自分の家族や職場の仲間に伝えること。このことが差別をなくす一番の近道であるという言葉で会を終えた。

それぞれの地域で仲間と取り組んでいる地道な実践を交流し合うことで、つながり学びあう場となった。少人数での討論となったが、被差別の人たちにとって住みやすいまちは全ての人にとって住みやすい町であること。被差別の当事者や厳しい環境におかれている人たちの実態のなかにこそ人権のまちづくりの課題があって、その課題を乗り越えるためには居場所、ネットワーク、顔の見える繋がりやチームワーク、役割分担と協働が必要であることが再確認できた。

終始アットホームな雰囲気の中で、参加した人たちが学習しあうことでよかったと思える場面が多くつられた。「学ぶ」ことによって「つながる」、「つながる」ことによってさらに「学ぶ」ということが、人権のまちづくりの重要なサイクルであることが実感できる2日間となった。

## 第4分科会

### 人権確立をめざすまちづくり

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか

#### ④分散会

#### I はじめに

6つの討議の柱を全体で確認し、この分科会で報告される4つの実践を中心に、参加されている様々な地域や団体の方々の取組、実践を交流しながら討議を深めていこうと呼びかけ報告、討議に入った。

#### II 報告及び質疑討論の概要

##### 一 報告1-②

#### 中学子ども会人権学習の取組み「みんなに教えたーい！」 (高知県人教)

子ども会での学習がしんどいという子どもの声を発端に、子ども会での取組を見直す中で自分自身をみつめなおし、子どもとともに学んでいきたいという思いとなった。そうすることから子どもたちが自発的に学びを発信していきたいと思うようになり、中学校で発表会を開催した。それは子どもたちがつながる機会となった。

##### 一 主な質疑と意見一

**福岡** ①子ども会での人権学習の内容が重たすぎるとは何との比較であったのか。学校での同和教育が軽いということだったのか。②この発表はいわゆる立場宣言と捉えてよいのか。この時周囲の大人(学校・地域)からはどういった支えがあったのか。③この活動は子どもの解放運動なのか、啓発活動なのか。どう考えているか。④周囲の子どもに差別への怒りが生まれたのか。反応はどうだったのか。

**報告者** ①中学校の関係者が本日はいないので詳しい状況はわからない。子ども会での学びは押し付けの内容であったと思う。解決や子どもへのフォローがなく差別の現実を子どもたちに突きつけていた。そのことを子どもたちには辛く感じたのではないかと思う。②学校は隣保館活動に小学校1年生のときから関わっている。学びもしっかりやっている。そして地区の子どもだということはみんなが知っている。隣保館活動は地区外の子どものと一緒にっており、発表もみんなで行った。立場宣言という捉えではない。保護者からは何かあればフォローするからやりたいようにやってよいと背中を押してもらっていた。

**高知** 同じ隣保館で働いている。③子どもにしな

くてはいけないと促したわけではなく、子どもたちがみんなに知ってもらいたいと思って実施された事業。そういった意味では啓発活動と捉えていた。

**協力者** 解放運動は仲間づくり。差別をなくす仲間づくりとして解放運動があるという捉えはあったが言葉として啓発とした。

**報告者** ④児童館に今まで関わらなかった子どもたちがこの事業以降に学びたいと関わろうようになった。関心を持ったのは事実だと思う。

**愛媛** 差別の現実が見えにくくなっている。現在どんな課題があり、子ども会の中でどのような取組があるのか。

**報告者** 以前は学びを重ねることなく差別の実態を押しつけてしまっていたのではないかと思う。3年の学びの中で差別される人は差別されるべきなのかをみんなで考えていった。そのうえで現在の結婚差別などを伝えることで理解が深まった。

**愛媛** 差別はあると言っても差別の現実を語れなくなっている。何か取組はあるか。

**協力者** 差別の事実を知っているということではなく、差別の現実から深く学ぶという話し込みができていくかということも含めてどうか。

**報告者** 差別はないからしなくても良いという保護者もいる。

**高知** 同じ地域の中にある保育所で働いている。保育所を立ち上げる時の様々な苦勞を語り伝えていく取組もある。

**高知** 同じ地域の別の児童館で働いている。人数は減ってきているが地域のおじちゃんやおばちゃんに話してもらったり自分も話したりしている。幅広い年代で子どもたちにアプローチしている。

**福岡** 子ども会がしんどいと子どもたちが言っていたと報告されたが、ほんとにしんどいと思っていたのは報告者ではなかったのか。先ほどの質問に対してだが、差別の実態は容易に語れるものではない。ムラに来て自分で学ぶべきだと思う。

**報告者** わたしがしんどかったのだということの後になって気づかされた。今は子どもたちと一緒に学んでいきたい、歩んでいきたいと思っている。

**協力者** 当事者が語るという意味を問い直してほしい。次のつながりをどう考えているか。受ける側の意識。それぞれの実践を通して交流ができたら良いと思う。

**福岡** 中学3年生のときに結婚差別を学ぶことになっているが時間をとらずに読み物を読んで終わるといふ授業もある。そこで教員が学ぶことから始めた。何度も話し合いを重ねて差別をどう乗り越えたかをムラの人にしっかり話してもらったこととなった。



**三重** 私は片方の耳が聞こえない。そのことを誰にも言えずにいた。また、小学校のときに部落問題を親から間違った認識で教えられた。その認識のまま教員になったが学校では子どもたちに差別をしてはいけないと教えていた。地区のある学校に転勤となった時は戸惑った。子どもたちが何でも語り合えるクラスを作りたかったが、どうして差別されるかもしれないことを語らないといけないのか疑問もあり本当にしんどかった。そうしたなかで地区の中に話をしに行っていた時「あんたにできることをすればいい」という言葉に促されて地区の人に自分の耳が聞こえないことを語っていた。地区の人が「それがあんたのしんどいこと、負いめなんだね」と言われて、耳が聞こえないことを自分自身が差別していることに気づかされた。そして自分を解いていくことで辛さがなくなってきた。語ることは自分を解放していくこと。今では81歳の母とともに地区の行事に行ったり学んだりするようになった。

**三重** 今ある問題を考えること、それをどうやって子どもに伝えていくか、学びにつなげていくか。それはこういうことだという手法ではない。私たちが差別をなくそうとする主体者であるかが問われている。

#### 一報告2-⑧

#### 「思い」を知り、「思い」に近づく～筑前町解放文化祭に向けての取り組みから～ (福岡県同教)

将来の展望が持てないといっていた子どもたちと学習を積み重ねていく中で、自分の夢が持てる子どもたちへと変わっていった。また、子どもたちの成長の様子を交えた解放文化祭の長期的な取組から、子ども会としてのつながりが育まれた。長期的な姿を見据えての活動と学習が重要であると思う。

#### 一主な質疑と意見一

**愛媛** どうやって学校をまきこんでいるか。

**報告者** 朝倉はどこも配置校。まだ意識の高まりが感じられない点もあるが、教員は自然と参加するようになる。しんどい実態はムラの子どものみではない。教員はしんどい子どもに関わってくれており、子ども会に行けば教員がいるのは当然のこととなっている。

**福岡** 劇は報告者が計画したのか。支部とのかかわりはどうだったのか。

**報告者** 子ども会担当がシナリオ作成。支部との関わりは薄い。報告ではなくセリフとして語られている。

**福岡** セリフを言うことができる力がついてくる。子どもの数は少ないが大人が熱い。けんかもする。子どもが「熱いから嫌い」と言っていたが熱さがわかることは大切なこと。過去に厳しい結婚差別があり今でも学習会を続けている。

**福岡** 保育所など若い保護者を集めて学習会を

している。何人かでも集まって学んでいければ良いと思う。半分くらい地区外の人だが声をかけ合っている。つながりを強く。

**福岡** 月1回額集会で集まっている。20年経った。研修に行くこともある。人数は少なくとも継続していくことが大切。

**協力者** 学びが様々な課題とつながってくる。課題は人それぞれである。

#### 一報告3-⑬

#### 桜井の地から、こころのかけ橋を！ (奈良県人教)

30回を数えるハンセン病回復者の作品展示を開催するにあたり、療養所を何度も訪問することから始め、人と人とのつながりのなかで開催に至った。事業を通して自分たちの出会いや学びの場ともしたいことから、多業種に協力を依頼し、当事者との関わりを重ねた。そうした中で、ハンセン病回復者と身内や旧友との再会など、ふるさとを繋ぐ一助となった。また、地域や子どもたちの変容をみる中で改めて当事者が語ることの重たさや自分の加害責任をどう考えるのか問い直された。

#### 一主な質疑と意見一

**兵庫** 熱い思いが伝わった。写真には子どもの食い入るような様子が映っているが、子どもたちにどんな学びや出会いがあったのか。

**報告者** どんな感想があったかはわからないが、人権教育を大切に取組んでいる学校であり、常に自分の家族や暮らしにつなげて考える取組を行っている。

**奈良** 桜井市人協は33団体が加盟。それぞれが様々な研修をしている。11の小学校での学習会も開催している。そういった活動の一環で今回の取組があった。作品から作者の人生を思う感想や、作品を通して課題を学ぶことができ良かったという声があった。知らないことは差別になる。まずは知ることから。出会いを大切にしたい取組を。

**報告者** 食べるものも手づくりのぬくもりがあった。一緒にやっていくことの大切さ、そういった仲間をつくっていくことが大切。

**三重** 回復者の回復には、病気からの回復と偏見からの回復の2つの意味があると思う。正しく知ること、実態に目を向けること、今でも偏見があるが自分たちがその社会を構成している一員であるという認識、自分の立ち位置を問いながら取組んでいくことが必要。

**島根** 継続していくこと、自分たちの学びとしての捉えが学ぶべきであると感じた。

**奈良** 継続することで広がりが出てきた。そういった意味での意義はあったと思う。

**三重** 人権を回復していく取組、出会うことで学ぶ姿が感じられた。ふるさとに帰ることができない残酷さを見つめていくことから、そのことが自分のこととして考えることに繋がったのではな

いか。どんな自分の振り返りに繋がっていったのか。

**報告者** 遺骨も帰ることができない回復者が家族や旧友と再会すること、ふるさとに踏み入れることの凄さは活動を継続する中で生まれたことだと思う。学校も出会いっぱなし、言いつぱなしはいけないと捉え交流を継続している。出会いから繋がっていくこと、そのことを通して学ぶこと継続していくこと。

#### 一報告4-⑮

#### 救護施設 長谷山荘による地域への啓発活動～死してなお疎外される人達のために～（三重県人教）

救護施設は何らかの様々な障害により自力で生活することが困難な生活保護者を対象とした入所施設。家族との関わりが持てない方がほとんどであり遠方からの入所者も多い。グループホームで生活訓練を行うことを計画した際に周辺住民への啓発不足のために実施できなかったことを発端に、市人協への加盟や職員の人権研修参加などを実施することとなった。地域住民に理解を深めてもらうために啓発活動を実施している。

#### 一主な質疑と意見一

**福岡** ①入所時に入所者が妥協することとはなにか。②グループホーム事業を反対した周辺住民の理由は何だったのか。③啓発活動の中に学校との交流はないのか。

**報告者** ①行政の措置で入所してくるので本当は来たくないと思っている人もいるが、行き場が無いので入所するしかない。そのため居心地が良くないと思っていると思われる。②たくさんことを言われた。障がいがあることとかではなく何が起ころかわからないという不安。③少しだが交流はある。学校での展示も行った。今後はイベントなどで展示等啓発をしていきたい。

**三重** 中学校教員。障がいのある方の施設は行ったことはあるが救護施設は知らなかった。報告者と関わる中で施設に行つて初めて知り、私がそんな社会を作っていたことに気づかされた。校区には様々な差別や偏見にさらされる子どもたちがいる。子どもたちへ救護施設の学びを始めた。切り口は様々、繋げていき発信していく。

**福岡** 今回はじめて知った。正しい学びと当事者との出会いを。

**鹿児島** 入所者の社会復帰が可能か。私になにができるか考えている。

**報告者** 社会復帰する方や就労継続支援B型事業所に通所している人もいるが少ない。刑務所から出所した際に短期間施設を利用するという方もいる。

**福岡** 中学校での福祉体験学習で学ぶことができないか。地域の祭りなどへの支援依頼はあるか。

**報告者** 祭りの支援依頼がある。いっしょに関わる中で学んでいけると良いと思う。大学生の実習

生が来ることもある。近くの施設に見学に行つてもらつたらつながれるのではないかと思う。

**島根** 就労継続支援B型事業所で勤務。地域で思いやる気持ちを育てていけたらと思う。

**鹿児島** 福祉体験学習で関わるのが怖いと言う子どももいる。取組がたりないためにパニックを起こす子どももいる。何ができるだろうかと考える。地元を持って帰つて取り組んでいきたい。

**三重** 地域で病気の勉強会をしている。病気を治すだけではなく家庭見直しが重要。病気への偏見、正しい学びの中で。

**報告者** どこに行つたかわからない同級生はもしかしたら全国の施設にいるのかも知れない。本当は施設がないほうが良いと思っている。誰かと関わりながら地域で生活できるよう。施設がなくなることをめざして取り組んでいく。

#### Ⅲ 総括討議及びまとめ

**島根** 親世代の誤つた認識のすり込みにより幼少時よりいじめを受けてきた。子ども会で気持ちを取り戻していた。結婚差別も受けた。地域で研修会を行う中で、もっと早く来ればよかった、自分たちが学ばなくてはいけないと言つてくれたことを励みに取り組んでいる。

**島根** 今回初めてこのような会に参加した。知らなかったことを恥じている。

**三重** 関わることで親が自分の差別心に気づいた。自分の中で何を核にして人権課題をみるか、自分の加差別性を常に認識していきたい。

**島根** 学校の教員。学校の研修は理論的なことが多くなりがちで、教員が学ばないと伝わらないと思う。今は生徒とうまく関われない自分と向き合っている。子どもの背景をしっかりと捉えて関わっていきたい。

**三重** 差別をなくすために人と人がつながっていくことが人がつながるということ。子どもの学びたいというひたむきな姿に真摯に向き合わなくてはいけないと考えている。地域の教師となるために地域で語りを聞きとっている。外国につながる子どもたちに綴りを行っている。

**高知** 人権に関わる仕事をして初めて差別を学び知つた。地域の方とつながり学校や保育所、子どもたちとつながる中で肩に入つていた力が向けてきた気がする。

**三重** 高知のレポートは良い提起があつたと思う。しんどいと言つた子どもたちが変わつていったこのきっかけから学んでいこうという取組には何があつたのか。

**三重** 子どもたちから気づかされた自分と重なる。うけとめられる自分でありたい。

**三重** それぞれで人権課題を明らかにしているか。しんどい話を聞いてくれる仲間づくりができているか。自己を語る中で。

**島根** 月に1回学習会をしている。学校、保育所

などが問題を報告しあう。参加者はいつも同じ人。横に広げていくことの難しさを感じている。

**島根** まずは地域の人に来てほしい。人推協の委員でテーマを決めて学習会をしている。

**三重** これまでの取組があった地域はどう深めていくか、継続していくか。これまで取組がなかった地域はどの地域でも取り組んだことを学んでいけば良いのでは。自分に置き換えて周りががんばらないといけない。

**高知** 職場で若い人が多くなっていく中でどうやって学びを造っていったらよいかと思っていたところ、報告者をお願いして子どもの実態を知ることとなった。関わっていないところへの輪を広げていきたい。

**大阪** 人権資料館を作りたい。年配の方が活動できなくなっていく中で、これからは私たちが担っていかなくてはならない。

**福岡** 部落解放は自己解放。ムラに住んでいるが子ども会に来ない子どもがいる。子ども会を知らずに大人になる。それは差別を生んでしまう可能性もある。来られない子どもと向き合っていくことが課題である。まちづくりは人づくり。

#### IV 討議の内容のまとめ

まず、課題や問題に気づける自分であるかということが参加者から語られた。常に自分の立ち位置を意識できる自分でありたいとの思いや、そこからの実践が語られる中で、見過ごさず流されない自分を意識していけることが重要であると感じた。日常生活する中で感じるもやもやした何か、その自分の中の課題を明らかにすること、それと対峙していく勇気と行動が必要であり、発言した全員からその意識を感じる事ができた。

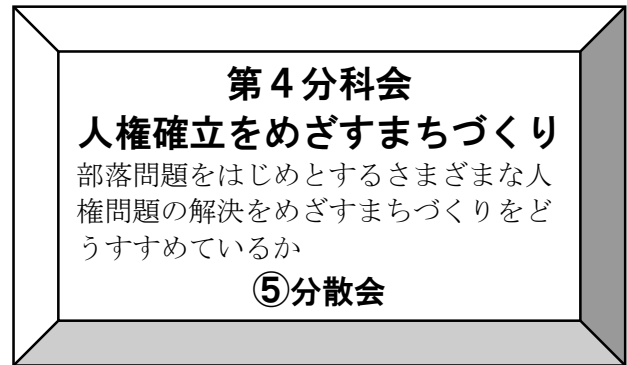
そして、課題を広げていくためには自分に近い人から共有し合っるとともに広げていくこと。周りにいる子どもたちや家族、地域と意思をつなげていくこと、つながりを広げていくことが大切であり、4つの報告の中に要素が詰まっていたと思う。

また、多くの参加者が今までに関わりがなかったと言っていた救護施設については、大会中に連携の動きや広がりを持てたのではないかと思う。報告者が、自らが働く場所がなくなることが望みで取り組んでいくと発言したとおり、本来は入所されずに地域でいきいきと生活されるべきである。今後社会復帰をめざして理解を深め取り組みを行っていくのは参加者一人ひとりであることが確認された。

当事者が語ることにしても全体を通して討議課題となった。ともすると当事者にとっては辛く残酷なことでもある語りを、受け取る側が次の活動につながる展望を持つことが重要であることが確認された。

4つの報告とともに参加者からも様々な取り組みが語られた。自己を語ることは、自分の差別

性に気づき自己を解放することに通じる。そして、自己の変容が起こり人とのつながりを取り戻す成果が話された。その営みを通して、これまで取り組みがなかった地域では地域のネットワークにより活動を継続していくこと、これまで活動があった地域では今度どう深めていくか、推進していくか。自分のこととして何が出来るかを問いながら差別を乗り越えるつながりを構築していくとまとめられた。



#### I はじめに

5本の報告からは、出会いや学びの中でつながりが深まり、その場所で育てられてきたからこそ、反差別の主体者として生きる報告者や子どもたちの姿が届けられた。討議の柱①③⑤「社会的立場の自覚」「差別撤廃・人権確立をめざす主体的な人間として生きる力」「社会教育と学校教育との連携」「差別に立ち向かってきた人々の生活の中にある自信や誇り」をキーワードに討議を進めた。

#### II 報告および質疑討論の概要

##### 一 報告1-⑩

##### 思いを重ねて ハンセン病問題と部落問題～仲間がいること～ (愛媛県人教)

報告者は、子ども会で育ち、親となった。地域の「自分の出身を知り、差別に負けない子どもたちを育てたい」という願いを受け継ぎ、現在、学校や行政と連携を取りながら活動している。「私が地域の人の声を聞いて育ったから、子どもたちにも聞いて欲しい」「地域の思いや願いがあるから、学校や行政がこけても踏ん張れる」と、反差別の主体者として生きる姿が届けられた。

また、子どもたちとともに、療養所を訪れ、ハンセン病問題への学びを深める取組も報告された。その中で、差別と闘う人たちの姿を部落問題と重ね、子どもたちがハンセン病問題を自分の問題として考えられるように変わっていった姿が報告された。

##### 一 主な質疑と意見一

**鹿児島** 地域・学校・行政がどのような連携をしているのか。

**報告者** 月一回、子どもに関する状況を共有する

場で、保護者の願いや思いを学校や行政に聞いてもっている。そのことに継続して取り組むことで、担当が変わっても、連携が続けられる。

**兵庫** 中学校の人権委員会について、具体的に教えて欲しい。

**報告者** 推進法が施行されたことを子ども会の子どもたちに伝えた。ハンセン病を学んだときに、子どもたちは法律が差別解消に直結するわけではないことを知ったので、自分たちで広げていくことを考えた。子ども会だけではできないので、中学校に相談すると生徒会と人権委員会が協力をしてくれた。子ども会に所属する人権委員会のメンバーも関わりながら、中学生が主体となりケーブルテレビで放送されるCMを作った。

**兵庫** 普段の学習内容についても教えてもらいたい。

**報告者** 小学生から高校生までともに学び、地域の人からの聞き取り学習を大切にしている。

**島根** ①地域教材を使った学習の効果②5小学校で同じ学びを経て中学校に進学をしているのか③フォーラムでハンセン病と同じように部落差別について取り上げたことはないのか④部落内外のラインについて、なぜ、そのように考えられたのか詳しく教えて欲しい。

**報告者** ①地域教材は昨年作ったので効果はまだわからない。③フォーラムではこれまでの人権劇で部落問題を取り上げたこともある。④子どもの頃から先生にも地区外の仲間にも、「部落問題は自分たちの問題なのに」と引けめを感じ、部落内外のラインを自分自身が引いてきた。

**愛媛** ②5つの小学校の学習状況は掘めていない。しかし、昨年度、教材を作ったので、他の小学校にも広げていきたい。今がスタートだと思っている。

**島根** 報告者が地区外の仲間に対して、「見なされるかもしれない」と思うことに違和感がある。部落差別は見なされないように差別をする問題なので、「見なされるかも」と見なすことを受け入れることは、差別につながるのではないのか。

**滋賀** この報告を地元でともに活動している親たちと一緒に聞いたかった。2年前に法切れ後の施策が切れたことで、子ども会もなくなり、学校や行政も引いていった。そういった状況の中で、今、改めて親どうしがつながろうとしている。40年前に解放運動が立ち上がったときとは違い、部落内外を越えて、親のつながりをつくろうと取り組んでいる。他人意識や自己責任論が部落差別を支えている。そこに立ち向かっていく、親どうし、子どもどうし、親と子のつながりをつくっていくことが、自分たちの世代の差別との闘い。

#### 一報告2-④

#### 仲間と学びを深めた3つの学習会（島根県人教）

中学生の頃、学習会に参加し、仲間や先生と学

び合い、語り合った。自治会が同和会支部の会合を兼ねていたことから、様々な意見に触れたことは、自分に何かできることはないかとさらに学びを深めていくことにつながる。地域の親の「子どもにどのように伝えたらいいのか」という声をきっかけに再開された蛍の会の代表となる。3つの場で、学びを深め、仲間とつながれたからこそ、次の世代をつないでいきたいという思いで活動する姿が報告された。

#### 一主な質疑と意見一

**奈良** 蛍の会について、地区外の親も巻き込みながら活動しているのか、先生が増えたことが活動を休止した理由と報告をされたが現状はどうなのか。

**報告者** 隣保館で地域の親だけで活動している。現在は、親に限らずに、学校の先生や行政の人にも参加をしてもらいながら活動をしている。

**兵庫** すべての小学校が同じ状況で中学校に進学できるよう取り組んでいる。自分自身も地域の学習会で、地区外の仲間とともに学んできた。同窓会で友人と再会したときに、「一緒に学んだから部落差別と出会ったときに声をあげられた。ありがとう」と返してくれた。それが成果のひとつだと思っている。

**島根** 部落差別が存在している以上、子どもたちは立場を自覚していく必要がある。それには、家庭や地域と学校が連携をしていく必要がある。ただ、学校が家庭訪問をして親に話を聞くことは大切なことだが、それは同時に過去の被差別体験を思い出させることにもつながることを知っておいて欲しい。

**島根** レポートに出てくる「うちの地域は怖いところなの？」と言ったのは私の娘。子ども会やかいほう学習をしていなかったため、親も部落差別の現状を知らない状況だった。子どもに聞かれたときに、どのように答えたらいいかわからない、多くの保護者が同じ悩みを持っている状況だった。私自身も、「今は差別がないのではないのか」「子どもたちが差別を受けることはないのではないのか」と思い、子育てをしてきたが、娘から言われたとき、現実に直面した。このままではいけないと、保護者も盛り上がりを見せた。子どもたちに、「差別に負けない力をつけたい」「知らないことでまわりからマイナスとして知ってしまうことは悲しい」という思いで、まずは保護者が学び、子どもたちに正しく伝えていこうとスタートした。我が子だけではなく、地域の子に何かあったときは、みんなで考えていこうと活動を始めた。娘は立場を自覚し、現在、結婚相手にも立場を伝えた上で結婚した。子どもは大きくなったが、次の世代につないでいきたいという思いで、現在も蛍の会に参加し続けている。若い人が少なく、参加者も固定されているが、「止まってはいけない」

「やめてはいけない」、続けていくことが新たなつながりや仲間の輪を広げることになるという思いで活動している。

**報告者** 蛍の会で、「部落問題を私たちが伝えていかなくてははいけない」とメンバーが言ってくれたことが嬉しかった。

#### —報告3—⑩

#### こどもとの関わりの中で学んだこと～「地域・学校・家庭」のつながりの必要性～ (大阪市人教)

あそびの広場に集まってきた子どもたちは、いらいらを抱え、暴言や暴力によって自分自身を傷つけていた。ヒュウは、夜一人で過ごすことが当たり前前の生活を送っていた。「せめて晩ご飯だけでも一緒に」と始まった「にしなり☆こども食堂」の取組が報告された。

地域・学校・家庭が連携し、子どもが安心して過ごせる本当の自分で居られる場所をつくることで、子どもたちに多くの可能性が広がるような地域社会づくりの取組が報告された。

#### —主な質疑と意見—

**大阪** 子ども食堂に行くと、子どもたちは笑顔で、満たされている。子どもたちの現実から出発しないといけない、学校もそのような関わりをしなくてははいけないと思知らされる。

**滋賀** ヒュウは今どうしているのか。

**報告者** ヒュウは5年生になった。夏休みにも、外を出歩き、みんなで探した。未だに彼とはぶつかる。彼を見つけたとき、「お前にオレの気持ちかわかるのか」と言われた。その言葉に「あんたに私の気持ちはわかるのか」と返した。自分の気持ちをわかって欲しかったら、少しは人の気持ちを考えるように伝えた。最初、自分の必要な物を買うときも、自分で決められなかったヒュウが、今は、自分の好みや好きなものを言えるようにまで成長している。様々な人の関わりの中で、人を信じてもいいのではないかと思始めてくれているのではと感じている。

**大阪** 学校としては、愛される経験をたくさんさせたい。学校が終わる時間になるとヒュウは不安になる。母親が運動会に初めて参加してくれた。本当に嬉しそうヒュウの表情があった。学校に来なかったとき、家に行くと、宿題が開いてあり、枕にうつぶせになっていた。起きたら登校時刻を過ぎていたと話してくれた。そういったヒュウの姿がある。

**滋賀** 子ども食堂は登録制なのか。また、地区外に、広げていくことは必要なことだが、「お前もあそこに行くのか」という発言にもつながったりする。居場所づくりと簡単に語られたりするが、報告にあった「単なる場所ではなく、人と人がつながる場所」という言葉に共感する。

**報告者** 決まり事としては、一人親の家庭の子で、なおかつ、面談もした上で来てもらっている。「あ

そこに行くとは貧困に思われる」と思っているのはおとな。発信もしているし、知らない人には関わって欲しいと訴えている。たった一人の子から始めたので、この子が話したいと思ってくる場所は居場所。そういった場所を小学校区にひとつつくりたい。当たり前前に存在すれば誰も困らない。

**長野** どういった面談をしているのか。人数が増えることで、本来、関わる必要がある子が見えにくくなってしまおうという話があった。そこから、どのように変えていったのか。

**報告者** 面談と言っているが、一人ひとりの子どもにに応じて、顔をみてあいさつをしてもらえればいい。しんどい子は、おとなの様子をよく見ている。一人の子から始めたので、みようと努力している。一人にこだわると、まわりにいる子どもたちも見えてくる。その子とつながる様々な子どもたちが見えてくる。子どもと関わる時は覚悟なくとはいけないと教えてもらったので、それを私自身が次に伝えていきたいと思う。

#### —報告4—③

#### 「部落差別と私のあゆみ、そしてこれから」

(高知県人教)

小学生から解放子ども会に参加する。高校生友の会で参加した部落解放全国奨学生集会で、同世代の仲間の被差別体験を知るとは、差別に対する不安と、差別には負けないという決意の芽生えにつながっていく。

住職になるための研修中、自分の立場を明かしたことは、自分の人生の課題と歩む道を見定めていく出来事となる。今、地域の中で、住職として、親として、どのようにつながりをつくっていくか悩みながらも歩む姿が報告された。

#### —主な質疑と意見—

**島根** 宗教と部落差別との関わりについて、教えて欲しい。

**報告者** 教えとして、生きる支えになった宗教が、逆に人々を縛ってしまうという現実がある。宗教に関わるものとして、教団の意識、社会の意識を課題として取り組んでいきたい。

**滋賀** 気になっていることや人とのつながり、報告者の前にどのような現実があるのか。報告には、「部落差別は解消してきている」とあるが、そう思えない自分自身がいる。差別に対して、自分がどう生きていくか見つけられたのは、まわりの人の関わりがあったから。見つけられていることだけでなく、次の一歩を見つけれられる出会いをしていきたいと思、全同教大会に参加をしている。

**三重** 保護者の中には「そういうものだから仕方がない」という感覚や泣き寝入りをしてしまっている親もいる。小中高にあがるにつれて、つながりが断たれていってしまう。昨日の報告の中でも、子ども会を通じて、つながっていったことが報告をされた。子ども会へ参加したきっかけや先生と

のつながりについても教えて欲しい。

**報告者** 親や先生の勧めもあったが、入ることが当たり前前の環境の中で子ども会に入った。地域は解放同盟の活動も含め、完全に止まってしまっている。高齢化が進んでおり若い自分たちに任されているものの、同世代とつながれない状況がある。どのように地域全体で意識向上をしていけばいいか大きな課題として持っている。私は住職として、学びの中で、関わる事ができたからこそ、そして、何よりも子ども会での学びや活動が根本にあるから、学びの場や活動を絶やしてはいけないと思えている。そして、今、親となり、地域や親が願って来てくれたことを次に渡したい。子ども会は隣保館の職員に任せきりになっている。呼ばれたら参加をするという関わり方ではないかと昨日の報告を聞いて思った。もがきながらも取り組んでいきたい。私自身は、出会いの中で、熱や光、生きる力を与えてもらったから、出会える場をつくっていききたい。

**兵庫** 報告を聞いて、部落差別の現実の中を生きてきた親や祖母と向き合いたいと思った。

**滋賀** 立場宣言後、「同級生をはじめ、よく言ってくれたと返してくれた」という報告に違和感がある。関わった子が、高校で立場宣言をした。立場宣言が目的ではなく、立場宣言を通じて、みんなに伝えたいことがあったから、部落出身であることを言わなければ伝わらないからと話してくれることがある。立場を伝えることが目的になってはいけない。

**報告者** 研修の場においても、寝た子を起こすなという考えや関係ないという言葉が飛び交っていた。今もあることを知って欲しかったから伝えた。

#### 一報告5-⑳

##### 心をつなぐ

(熊本県人教)

遠かった部落問題が、町の職員となり、職員学習会の中で、子どもに立場を伝えることに葛藤する現実や、小学生の頃から知っている青年の被差別体験を知ったことで、身近になっていく。隣保館に勤務することになり、ムラのおばちゃんとお会う。なかなか話しかけてもらえないこと自体が差別の現実と知り、関係をつくることで打ち明けてくれた悔しさに動かされていく。「聞いた」「知った」で終わらせない、人をつないでいく姿が届けられた。

##### 一主な質疑と意見一

**愛媛** 光座は、どのような職種の人が参加しているのか。

**報告者** 小学生から70代まで参加している。行政職員、教職員、地域の人や地区外の人参加をしている。

**島根** 報告者は隣保館の職員を経験されている。職員の研修はどのような形で行われているのか。

光座の目的や活動について聞かせて欲しい。

**報告者** 職員研修は年2回、全職員を対象に行われ、各課から担当職員が出て、人権フェスティバルに参加をしたり、啓発を行ったりしてきた歴史がある。現在は、職員学習会として、自分たちで学習する機会がない。隣保館に勤めているときは、職員学習会の実施を提案し、実際に全職員対象の研修会が再開された。

**熊本** 町長が、若い頃に部落差別によって結婚が進まないということを経験されている。解放運動と町長のまちづくりの方向性が一致したこともあり、人権行政を進めてきた。人権フェスティバルは20年以上続いている。多いときは、町の3分の1の人が参加をしている。部落差別をなくすために、いかに地区外の人を巻き込んでいくかを運動の精神にしている。子どもの人権劇をみて、子どもががんばっているのに、おとなは何をしているのか問われたことをきっかけに、町職員が中心となり劇団を立ち上げた。目的は部落差別をなくすこと。

**大阪** 子どもたちには、報告者のような生き方をさせたい。家庭環境や出会った人の意識が、子どもに影響を与えていく。子どもたちに、どのような関わりがあれば、否定ではなく、相手のことを考えられるようになるのか、体験から思うことを聞かせて欲しい。

**報告者** 私は地域の人と出会い、つながることで変えられてきた。父も最初は偏見を持っていた。しかし、私が楽しそうに帰ってくる姿をみて変わっていった。言葉では伝えられないものがある。自分の姿を見せていく、伝えていくことが必要ではないかと考えている。

**熊本** 同和保育と出会い、先輩たちが、子どもたち一人ひとりにしっかり関わる姿や親とつながっていく姿を身近でみることで、実際に自分自身が関わることで部落問題が自分事になっていった。子どものことをしっかり見つけ、保護者とともに関わることを大切にしたい。

**滋賀** 寄り添うということがキーワードにあった。寄り添うことで、子どもたちが自分の思いを伝えていく、一緒に見つけていく姿勢に学ばせてもらった。寄り添うだけで終わってはいけない、その先にあるものを共有していくことが必要だと改めて考えさせられた。

**報告者** 寄り添うことがゴールではなく、スタートだと思っている。自分がしたいことを悔いなく、子どもたちに接していきたいと心にとめたい。

### Ⅲ 総括討論

#### 一総括討論(1日目)一

**奈良** 島根で生まれ、奈良で教員をしている。大学生になるまで、部落問題は存在しないものと思ってきた。大学生の頃、「あそこには行かない方がいい」と言われ、存在する事実とともに、自分

に知識がなかったことにショックを受けた。今日の報告や討議の中で、「出身だから知っておかなくてはいけない」とあったが、「出身じゃないから知っておく必要がある」とも実体験から思う。出会ったときにどう返していくか、子どもたちと学びを深めたい。

**愛媛** 中学生が部落差別解消推進法を広げるためにCMを作った。子どもたちとともに、自治会への働きかけや地域まわりをしたい。

**報告者（島根）** 若い人は、もう部落差別はないと勘違いしている人も多い。若い人が変わっていくことで社会が変わる。

**報告者（愛媛）** 部落問題とマイナスで出会った。プラスに変えてくれた子ども会や地域の人っていて、私は育てられた。差別されるかわいそうな人ではなく、差別と闘う素敵な生き方をしている人と知ったからこそ、子どもたちにはプラスで出会わせたい。「見なされる」という表現で意見をいただいたが、わかってきている、受け止めてくれる、ともに闘う仲間だから、仲間が差別されるのは許せないし、怖い。

**愛媛** 社会的立場の自覚は、生き様と出合わせ、差別を許さない力を獲得させていくことだと思っている、だからこそ、最初の出会いを大事にしたい。

**島根** 部落差別の厳しさ、息苦しさ、部落差別の現状を久しぶりに聞き、思いを新たにしたい。

#### 一総括討論(2日目)一

**滋賀** にしなり☆こども食堂の根底には、部落解放運動の理念がある。たった一人のためにスタートした。居場所は人ということ学ばせてもらった。

**奈良** 解放同盟として、学校、地域、保護者と連携をしながら、子どもの育ちを保障する取組を勧めてきた。人権のまちづくりの具体化として、すべてではないが、各支部で子ども食堂の取組を行っている。私の地域では、中学生友の会も支部の取組として行ってきた。法律があるときは、学校が主体となっていたが、法切れで学校は引いていった。しかし、子どもの実態は法が切れても変わらない。一人ひとりの状況が見えにくくなっている。久しぶりに若い先生が4人参加してくれた。一緒に歩んでくれる若い先生のエネルギーは大きいと感じている。

**愛媛** 子ども会の第一期生だった報告者は、当時、地域の中でつながりながら子ども会に関わっていた。中学生が学びを発表する機会があり、その中学生の姿に震え、子どもに解放することを学ばせてもらった。子ども会への支援体制がなくなってきた。子ども会での学びが社会を変えることにつながる。

**熊本** 町は10年前に体制が変わり、逆風の中で活動を続けてきた。差別は人を信頼する力を奪っ

ていく。いかに信頼できる関係をつくることができるか考えながらまちづくりを行っている。熊本では、水俣病を5年生で学習しているのに差別発言が後を絶たない。知るだけで終わっている。そこに学びがない。

**愛媛** 全同教大会に参加し、モヤモヤしている。部落の人、差別を受ける人、地域の人、どのような人なのか。自分自身も、部落に生まれたが、部落外に住んでいる。子ども会には、外に出ると入れなくなるのか。報告の中の「逃げることは自分の権利を守るひとつの手段」という言葉に共感した。

**報告者（高知）** なぜ、お寺を継がなければいけないのか悩む人が多い。私は「休む」という言葉を使っている。休んで考えてもいい、だから、やめないで欲しいという思いを持っている。

**奈良** 部落の人とはどのような人かという意見があった。それは、差別をする人に聞いて欲しい。する人が決めること、私たちにはされる理由なんてない。

**滋賀** 行政が手をひき、建物も壊されていっている。しかし、現実には差別がある。どのようにしていくか、明日からの実践につなげたい。

**愛媛** 続けてやっていくことに意味がある。やり続けることの大切さを実感している。これまで何をしてきたのかと考えることもある。それよりも、これから何をしていくか考えたい。

**滋賀** 大阪の報告に「居場所は人」とあった。もう一度、自分に戻し、具体的に取組の中で、この言葉を形にしていきたい。自分の人に言いたくなかったこと、誰にも言えなかったこと、こじ開けてくれたのは担任と幼なじみのお母さんだった。普段、何気ない会話や笑いあったり、ぶつかりあったり、説教もされたり、つくってきた関係性があるから言葉が心に届く。その刻んでくれた言葉は、私の今の保護者としての地域づくりのモデルになっている。そういった話が近所の人や子どもたちとできる町をつくりたいと思いながら取り組んでいる。話してもらっただけではいけないと熊本の報告にあった。関係性をつくる時に、今、自分の前にある差別の現実が何かということをも明らかにし、共有しあえる関係、その中で自分がどうもがいているのかということ話し合えるようにしていきたい。保育園の保護者で、講演会の後、分散会にわかれ、講演が自分とどう関係しているか、それぞれの思いや経験を話すことで、お互いを知り合っていくことで、つながりをつくっている。

#### IV まとめ

まとめでは、次の三点のことを確かめあった。

一点めは、「つながり」について。会場からは、地域の中の親のつながりとして、「子どもたちには差別に負けないで欲しい。まずは、自分たち親

が正しく知ろう」と立ち上がった親の会の取組が届けられた。また、部落内外の親のつながりとして、差別をなくす同じ思いを持った仲間として広がった親の会や、部落問題を他の人権課題と重ねながら、語り合うことでつながりを深めている親の会の取組が届けられた。同時に、親どうしがつながれない課題も出された。

親の会の状況は、地域によって様々で、先輩たちがつくった親の会を引き継ぎ、続けている場合もあれば、一度途絶えたものを再結集させ集まっている場合もある。親の世代交代が進んでいく中で、会そのものを形骸化させないためにも、親どうしが集まり、つながる必要性を原点として大事にしていきたい。

さらに会場からは「つながりをつくっていくことが闘い、それが差別に負けない力になる」「ときには逃げることも必要、準備なしに闘う必要はない」という声も届けられた。現在、インターネット上には、名前や住所などの部落出身者の個人情報や地域名が公開されている。子どもたちにいつ差別が降りかかるかわからないからこそ、親どうし、親と子、地域の人など、つながりをつくっていくことがこれまで以上に求められている。

二点めは、「連携」について。討議の中で、「地域・学校・行政のどこも欠けてはいけない。仮に、どこかが欠けたとしても他が踏ん張ればいい。他が変わっても地域は変わらない」「止まっただけはいけない。やめてはいけない。歩み続けるから、新たなつながりができる」という思いが語られた。また、「聞いた、知った自分で終わらせない。聞いて、知って、学んだからこそ、身近になり、自分と向き合えた。その自分が行動に移していく」という思いも語られた。

地域は「自分たちの横に立って欲しい」「子どものことを一緒に守って欲しい」という声や願いをどのように届けていくか、また、学校や行政、まわりがどのように受けとっていくか。差別の現実を明らかにし、共通の願いや思いとして、すりあわせていくことが、連携を深めていくことにつながることを確認した。

三点めは、「立場の自覚」「伝えていく意味」について。社会的立場の自覚は、被差別当事者の自覚ではなく、差別を許さないという立場の自覚であることは、これまでの分科会でも討議を重ねてきた。討議の中で、「学んだから、差別を放っておかずに一緒に考えられた」「自分が部落問題を知らなかった。出身じゃない人こそ知っておく必要がある」「立場をただ知るだけではない。生き様と出会わせる。地域で生きる人と出会わせていく。それが差別を許さない生き方を獲得させていくことにつながる」という声も届けられた。

また、「関わっている子どもたちが、この地域が好き、人とつながることが大切、支えられてい

ると実感することで、将来、支える側になって欲しい」「子ども会や地域の人がプラスに変えてくれた。差別と闘う人、ここでのつながりに誇りを持ちたい。だから、自分が立つことで、子どもたちに伝えたい」という声も届けられた。

立場の自覚の意味は、具体的な経験や実践で確認された。同時に、自分の立場を明確にさせることが、寄り添うことにもつながっていくことを確認した。

そして、「立場宣言そのものを目的にしてはいけない」という声は、改めて伝える意味について、問題提起をしていただいた。これまで「この人なら一緒に考えてくれる」「この人に伝えたい」「ここで言わなければ自分自身をも否定することになる」等、様々な思いで、自分にとっての必要性をもって、立場を明かす取組が進められてきた。それは、あくまで自分の意志で決めてきたことであり、決して他人に強制されるものではない。しかし、インターネット上で起こっている他人が部落出身者の情報や地域名を暴いていくことは、同和教育が築いてきた取組をくつがえそうとするものである。改めて立場の自覚とともに、伝えていくことの意味をそれぞれの地域や学校で考えていくことを確認した。